

E. ベルンシュタイン, K. カウツキー, R. ルクセンブルク文献目録

——ドイツ社会民主党内の帝国主義論関係邦語文献目録(1)——

長 島 伸 一

ここに提供する文献目録は、ドイツ社会民主党に関連のあった人々、とりわけ、ベルンシュタイン、カウツキー、ルクセンブルク、ヒルファディングの著書及び論文の翻訳と、かれらの帝国主義論に関する邦語研究論文を収録したものの一部である。基本カードの作製にあたっては、次にあげる書誌によった。戦前については、百十数誌の雑誌の創刊号から1927年末までを収めた天野敬太郎編『法政・経済・社会論文総覧』全2冊(刀江書院, 1927~28年), 1916年から1930年までを収めた神戸高等商業学校商業研究所編『経済・法律文献目録』全2冊(宝文館, 1927~31年), 1919年から1936年までについては大阪商科大学経済研究所編『経済学文献大鑑』全4冊(1934~39年, 復刻版, 文生書院, 1977年)によった。その後の空白は、『国民経済雑誌』によってうめた。

戦後については、大阪市立大学経済研究所編『社会科学文献解説』全10冊(日本評論新社, 1947~53年)および同研究所編『経済学文献解題』(日本評論新社, 1957年), それ以降については、経済資料協議会編『経済学文献季報』(現在まで通巻103号刊行)によった。したがって収録期間は明治末期以降1981年末までである。

こうして作製された基本カードを補足するものとして、戦前については、大原社会問題研究所編『所蔵文献目録』(1969年)および法政大学図書館編『協調会文庫目録』(1977年)によった。戦後は、大阪経済大学日本経済史研究所編『経済史年鑑』(1951~56年版), 『経済史文献』(1957~58年版), 『経済史文献解題』(1959年版以降, 日本評論社), 日本政治学会編『日本政治学文献目録』(福村出版, 1965年以降), 国立国会図書館参考書誌部編『人物文献索引』(人文編, 1967年, 経済・社会編, 1969年, 法律・政治編, 1972年), 慶応義塾大学三田情報センター編『経済学関係記念論文集記事索引』(1971年), 国立国会図書館参考書誌部監修『雑誌記事索引——人文・社会編——累積索引版』(経済/社会, 紀伊国屋書店, 1976~81年), 天野敬太郎監修『現代日本執筆者大事典』全5冊(日外アソシエーツ, 1978~80年), 深井人詩編『人物書誌索引』(日外アソシエーツ, 1979年), 図書館科学会編『全国短期大学紀要論文索引』(人文科学・社会科学編, 埼玉福祉会, 1982年)などによって補った。

個人別の書誌については、以下に掲げるドキュメンタリストおよび研究者の成果を利用した。

(1) ベルンシュタイン Peter Gay, *The Dilemma of Democratic Socialism : Eduard Bernstein's Challenge to Marx*, New York 1952. Pierre Angel, *Eduard Bernstein et l'évolution du Socialisme allemand*, Paris 1961. Thomas Meyer, *Bernsteins konstruktiver Sozialismus : Eduard Bernsteins Beitrag zur Theorie des Sozialismus*, Berlin, Bonn-Bad Godesberg 1977. 田村雲供「ローザ・ルクセンブルク文献目録」〔→III-254〕

(2) カウツキー Werner Blumenberg, *Karl Kautskys literarisches Werk : Eine bibliographische Übersicht*, Amsterdam 1960. 内藤昶夫「カール・カウツキー文献」〔→II-135〕. 田村前掲文献目録。
(欧米の研究論文については、Walter Holzheuer, *Karl Kautskys Werk als Weltanschauung. Beitrag zur Ideologie der Sozialdemokratie vor dem Ersten Weltkrieg*, 1972. G. P. Steenson, *Karl Kautsky 1854-1938*, Pittsburgh 1978. Reinhold Hünlich, *Karl Kautsky und der Marxismus der II. Inter-*

nationale (Schriftenreihe für Sozialgeschichte und Arbeiterbewegung Band 22), 1981. の巻末を参照).

(3) ルクセンブルク Jadwiga Kaczanowska (przy konsultacji i współpracy Feliksa Tycha), Bibliografia pierwodruków Róży Luksemburg, *Z pola walki*, 1962, N. 3(19). J. Peter Nettl, *Rosa Luxemburg*, 2vols., London 1966. *Rosa Luxemburg Gesammelte Werke*, hrsg. von IML/ZKdSED, 1970~75. 田村前掲論文. 西川正雄「ローザ＝ルクセンブルク——史料と文献」〔→III-282〕. 伊藤成彦「日本社会主義運動とローザ・ルクセンブルク」〔→III-288〕. 丸山敬一「ローザ・ルクセンブルク邦語文献目録——1921年～1979年末」〔→III-346〕.

(4) ヒルファディング 拙稿「R. ヒルファディング文献目録——ドイツ社会民主党内の帝国主義論関係邦語文献目録(2)」(『大学院紀要』〔法政大〕9, 1982年)を参照.

その他のドイツ社会主義・帝国主義論に関する主題別文献目録として、以下のものを利用した。

まず、本目録の範囲外ではあるが、欧米の研究文献の書誌として、Hans-Josef Steinberg, *Sozialismus und deutsche Sozialdemokratie. Zur Ideologie der Partei vor dem 1. Weltkrieg*, Hannover 1967. Hans-Christoph Schröder, *Sozialismus und Imperialismus. Die Auseinandersetzung der deutschen Sozialdemokratie mit dem Imperialismusproblem und der »Weltpolitik« vor 1914*, 1968. *Modern European Imperialism: A Bibliography of Books and Articles, 1815-1972*, 2vols., 1975. Hans-Josef Steinberg, *Die deutsche sozialistische Arbeiterbewegung bis 1914: Eine bibliographische Einführung*, Frankfurt am Main 1979. Klaus Tenfelde, Gerhard A. Ritter (hrsg.), *Bibliographie zur Geschichte der deutschen Arbeiterschaft und Arbeiterbewegung 1863 bis 1914. Berichtszeitraum 1945-1975*, Bonn 1981. などがある。わが国で作製された同じ領域の書誌および書誌の書誌として、林健太郎編『ドイツ現代史総合文献目録』(東京大学出版会, 1966年). 西川正雄「第2 インターナショナルおよびドイツ社会主義・労働運動の歴史——文献目録」(『現代史研究』24, 1970年). 西川正雄「ヨーロッパ労働運動史研究について」(『歴史科学への道』上, 校倉書房, 1976年). 西川正雄「ドイツ社会民主党史——文献目録(講義資料)」(『歴史と文化』〔東大教養学部人文科学科紀要70〕, 1980年)などがある。

邦語文献を含む目録として、以下のものを参照した。越村信三郎編『最近の独占研究』(東洋経済新報社, 1959年)に所収の富山和夫「独占にかんする文献目録」. 義井博他「第一次世界大戦史研究の動向」(日本国際政治学会編『国際政治』有斐閣, 1963年, 所収). 清水嘉治・富山和夫「帝国主義にかんする戦後の文献目録」(井汲卓一編『現代帝国主義講座』V, 日本評論新社, 1963年, 所収). 松尾展成・肥前栄一・渡辺尚・柳沢治・大月誠「ドイツ資本主義に関する邦語文献目録 1965年2月現在」(『ORGAN』2, 1965年). 清水嘉治『帝国主義論研究序説』(有斐閣, 1965年)の巻末文献目録. 西川正雄「ドイツ近現代史関係邦語単行本目録」(『史論』〔東京女子大〕, 1971年). 檜哲子「ドイツ近現代史関係論文目録」(前掲誌, 所収). 安世舟「ドイツ社会民主党史序説」(御茶の水書房, 1973年)の「附記」および「参考文献」. 入江節次郎・星野中編『帝国主義研究』I (御茶の水書房, 1973年)の巻末「帝国主義論の方法に関する文献目録」. 1975年度ドイツ史ゼミ編「ドイツ近現代史関係論文目録」(『史論』29, 1976年). 入江・星野編『帝国主義研究』II (御茶の水書房, 1977年)の巻末文献目録. 高須賀義博編『独占資本主義論の展望』(東洋経済新報社, 1978年)の巻末参考文献. 山本佐門『ドイツ社会民主党とカウツキー』〔→II-234〕の巻末文献目録.

また人物文献目録としては、それぞれ以下のものを利用した。

(i) エンゲルス 坂脇昭吉「戦前のわが国におけるエンゲルス研究文献について」(『千里山経済学』〔関西大・大学院〕4, 1970年), 同「戦後のわが国におけるエンゲルス研究文献について」(『鹿児島大学教育学部研究紀要』23, 1972年).

(ii) ベーベル Ernst Schraepler, *August-Bebel-Bibliographie. Bibliographien zur Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien*, 3, Düsseldorf 1962.

(iii) ツェトキン Heinz Gittig, *Clara Zetkin. Eine Auswahlbibliographie der Schriften von und über Clara Zetkin. Arbeitskreis der gesellschaftswissenschaftlichen Beratungsstellen an den dem Staatssekretariat für Hochschulwesen unterstellten wissenschaftlichen Bibliotheken. Schriftenreihe, Nr. 4*, Berlin 1957.

(iv) パルヴス W. B. Scharlau u. Z. A. Zeman, *Freibeuter der Revolution, Parvus-Helphand : Eine politische Biographie*, Köln 1964. English transl., London 1965. (蔵田雅彦・門倉正美訳『革命の商人——パルヴスの生涯』風媒社, 1971年).

(v) K. リーブクネヒト Heinz Gittig, *Karl Liebknecht, Rosa Luxemburg. Ein Auswahlverzeichnis der Schriften von und über Karl Liebknecht und Rosa Luxemburg. Arbeitskreis der gesellschaftswissenschaftlichen Beratungsstellen an den dem Staatssekretariat für Hochschulen unterstellten wissenschaftlichen Bibliotheken. Schriftenreihe Nr. 3*, Berlin 1957.

(vi) パウアー Norio Yonekawa 「Otto Bauer 文献——Bibliographie über Otto Bauer」(『新潟大学経済論集』20, 1975年).

なお、上記の個人別書誌に関する情報は、前述の書誌のほか、水田洋「リトロスペクティブ・サーチの方法と問題」(伊大知・水田・藤川編『社会科学ドキュメンテーション』丸善, 1968年)からも得た。

凡 例

- 1 配列は発刊年・月順とし、表記は西暦で統一した。連続論文は初出箇所にまとめて示した。
- 2 タイトルは初出の表記に従い、その後改められた場合にはその旨明記したが、わずかな改訂の場合は原則としてふれなかった。
- 3 タイトル中の旧字(漢字)は新字に改め、カタカナ表記や送りがなはもとのままとした。また、漢数字は原則として算用数字に改めた。
- 4 巻号は、その間をハイフンでつなぎ、合併号はナカグロを用いた。
- 5 関連項目は→のあとに当該文献の数字を用いて指示した。
- 6 原則として現物に当たりページ数を記載した。欠本や貸出中のため確認できなかった文献の末尾には、アステリ(*)をつけて区別した。
- 7 事典・辞典類の項目および書評・紹介などは、原則としてリスト・アップしなかった。邦訳書の「解説」類や「月報」などもおおむね省略した。
- 8 欧米の研究者の邦訳文献も、体系的な欠くことを慎み、また将来外国語研究文献目録がわが国で作製されるさい考慮すべきものと考えて今回は割愛した。

(なお、事典類のうち注目すべきものとして、『世界名著大事典』全8巻(平凡社, 1960~62年)。

『社会科学大事典』全20巻(鹿島出版会, 1968~71年)、『現代マルクス=レーニン主義事典』全3巻(社会思想社, 1980~82年)、『世界伝記大事典』世界編・全12巻(ほるぶ出版, 1980年~81年)、『世界大百科事典』全37巻(平凡社, 1981年)などがある)

目 次

- I ベルンシュタイン (Eduard Bernstein, 1850~1932) 邦語文献目録
 - A ベルンシュタイン邦訳著書論文目録 (I-1~20)
 - B ベルンシュタイン邦語研究論文目録 (I-21~85)
- II カウツキー (Karl Johann Kautsky, 1854~1938) 邦語文献目録
 - A カウツキー邦訳著書論文目録 (II-1~125)

- B カウツキー邦語研究論文目録 (II-126~236)
- III ルクセンブルク (Rosa Luxemburg, 1870 od. 71~1919) 邦語文献目録
 - A ルクセンブルク邦訳著作目録 (III-1~163)
 - a 手紙 (III-1~17)
 - b 演説 (III-18~34)
 - c 論文 (III-35~129)
 - d バンフレットおよび著書 (III-130~163)
 - B ルクセンブルク邦語研究論文目録 (III-164~353) ——以上本号
- IV ヒルファディング (Rudolf Hilferding, 1877~1941) 邦語文献目録——『大学院紀要』第9号, 所収
- V 帝国主義論史・方法論関係邦語文献目録——以下本誌次号掲載予定
- VI ドイツ社会民主党・ドイツ共産党関係邦語文献目録
- VII [I~IV以外の] 個人別邦語文献目録

本稿はなにぶんにも個人の仕事であるために、思わぬ見落としや感違いなどの不備がありはしないかと慎んでいる。研究者・ライブラリアン双方からの御教示を頂ければ幸いである。

I ベルンシュタイン邦語文献目録

A ベルンシュタイン邦訳著書論文目録

Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, Stuttgart 1899. English transl., *Evolutionary Socialism*, New York 1909. Neue, verbesserte und ergänzte Ausgabe, Stuttgart 1920.

- 1 金原賢之助訳『マルクシズム批判』岩波書店, 1926年5月 (35, 9, 3, 53, 516p.)
- 2 松下芳男訳「マルキシズムの改造」『世界大思想全集』47, 春秋社, 1928年10月 (pp. 1~309)
- 3 守田有秋・松下芳男訳「マルキシズムの修正」『社会思想全集』13, 平凡社, 1929年11月 (pp. 1~372)
- 4 松井隆一抄訳「恐慌と近代的経済の適応能力」『マルクス恐慌理論』叢文閣, 1931年6月 (pp. 117~154)
- 5 松崎敏太郎抄訳「恐慌と近代的経済の適応能力」『恐慌論』叢文閣, 1935年11月 (pp. 117~154)
- 6 「シュトゥットガルト党大会における釈明」〔初版への序文の抄訳〕向坂逸郎編『マルクスの批判と反批判』(マルクス・エンゲルス選集16), 新潮社, 1958年3月 (pp. 250~254)
- 7 戸原四郎訳「社会主義の前提と社会民主党の任務」『世界大思想全集』II-15, 河出書房新社, 1960年1月 (pp. 1~227)
- 8 山本統敏他抄訳「社会主義の諸前提と社会民主党の任務」『第2インターの革命論争』(マルクス主義革命論史2), 紀伊国屋書店, 1975年5月 (pp. 47~69)
- 9 佐瀬昌盛訳「社会主義の諸前提と社会民主主義の任務」清水幾太郎責任編集『現代思想』7, ダイヤモンド社, 1974年2月 (pp. 1~289)

Wie ist wissenschaftlicher Sozialismus möglich?, Berlin 1901.

- 10 関嘉彦訳・解説「いかにして科学的社会主義は可能であるか」『改革者』163, 1973年10月 (pp. 22~32). 164, 1973年11月 (pp. 32~41)
- 11 佐瀬昌盛訳「科学的社会主義はいかにして可能か——エドゥアルト・ベルンシュタインの講演」『現代思想』7 [→I-9] (pp. 291~331)

Der Revisionismus in der Sozialdemokratie, Amsterdam 1909.

- 12 嘉治隆一訳『修正派社会主義論』(新人会叢書2), 聚英閣, 1920年10月 (6, 4, 2, 124p.)

Wirtschaftswesen und Wirtschaftswerden, Berlin 1920.

- 13 石浜知行抄訳「経済生活の諸形態」(1)~(3)『社会思想』5-11, 1926年11月 (pp. 40~51). 5-12, 1926年12月 (pp. 34~44). 6-2, 1927年2月 (pp. 38~44, 63)
- 14 松下芳男訳「経済制度と経済発展」『社会思想全集』13〔→I-3〕 (pp. 373~515)

Der Sozialismus einst und jetzt. Streitfrage des Sozialismus in Vergangenheit und Gegenwart, Berlin-Stuttgart 1922.

- 15 上田肇訳『社会主義の過去及現在——過去及現在に於ける社会主義の論争問題』日本評論社 (社会文庫22) 1936年6月 (5, 1, 6, 387p.)

Das Görlitzer Programm der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands, Berlin 1922.

- 16 高野岩三郎抄訳「独逸社会民主党ギョルリッッ綱領解説 (理論の部)」『大原社会問題研究所パンフレット』2, 同人社, 1922年7月 (pp. 35~67)

Entwicklungsgang eines Sozialisten. Sonderausgabe aus : Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen, Leipzig 1924. Leipzig 1930.

- 17 佐瀬昌盛訳「一社会主義者の発展のあゆみ」『現代思想』7〔→I-9〕 (pp. 333~401)

Die politischen und sozialen Probleme der Deutschen Republik.

- 18 [無署名]「独逸共和国の政治及社会問題を論ず」『改造』4-1, 1922年1月 (pp. 114~128)

Der Sozialismus als soziologische Entwicklungslehre.

- 19 [無署名]「社会学的進化論としての社会主義——社会主義の論争に関する紹介」『改造』4-2, 1922年2月 (pp. 85~92)

[原タイトル名不明]

- 20 [無署名]「同盟罷工防退の方法」『日本経済新誌』〔河上肇編輯・発行〕3-1, 1908年4月 (pp. 21~22)

B ベルンシュタイン邦語研究論文目録

- 21 室伏高信「カウツキーとベルンシュタイン」『改造』3-13, 1921年*→II-126
- 22 金原賢之助「ベルンシュタインとマルクス主義」『三田学会雑誌』16-1, 1922年1月 (pp. 80~89)
- 23 小泉信三「ベルンシュタインのボルシエギズム批評」(以下)『財政経済時報』10-4〔5〕, 1923年3月1日 (pp. 12~16). 10-6, 1923年3月15日 (pp. 12~16)
- 24 金原賢之助「労働価値説に対するベルンシュタインの—批評」『三田学会雑誌』17-10, 1923年12月 (pp. 169~180)
- 25 金原賢之助「修正派社会主義概論——特に唯物史観及び近世社会の経済的進化に関するベルンシュタインの見解」『三田学会雑誌』19-5, 1925年5月 (pp. 69~112)
- 26 松下芳男「ベルンシュタインの経済形態論」『日本法政新誌』〔日本大〕22-9~12, 1925年*
- 27 小泉信三「マルクス主義とマルクス修正主義 (近世社会思想大略第18講)」『財政経済時報』13-12, 1926年9月 (pp. 6~16) / 『近世社会思想史大要』岩波書店, 1926年11月 (pp. 256~281) / 『小泉信三全集』8, 文芸春秋, 1968年1月 (pp. 186~203) →II-128
- 28 榎本謙輔〔波多野鼎〕「ベルンシュタインの唯物史観修正論の批判」『社会思想』5-10, 1926年10月 (pp. 17~37)
- 29 河合栄治郎「紹介及批評ベルンシュタインの『追放時代』」『経済学論集』〔東京帝大〕5-3, 1926年12月 (pp. 251~273) / 『英国社会主義史研究』(河合栄治郎選集4), 日本評論社, 1948年2月 (pp. 483~506) / 『河合栄治郎全集』5, 社会思想社, 1968年3月 (pp. 377~396)
- 30 波多野鼎『新カント派社会主義』日本評論社 (社会科学叢書12), 1928年*

- 31 河合榮治郎「ベルンシュタインの思い出」『帝国大学新聞』1933年12月8日*／『学生生活』日本評論社，1935年6月*／『第一学生生活』（河合榮治郎選集2）日本評論社，1947年1月（pp. 285～294）／『河合榮治郎全集』16，社会思想社，1968年5月（pp. 235～242）
- 32 河合榮治郎「独逸社会民主党とマルキシズムの修正」『経済学論集』4-6，1934年6月（pp. 1～79）／『欧州最近の動向』日本評論社，1934年9月（pp. 48～185）／『独逸社会民主党史論』（河合榮治郎選集10）日本評論社，1950年9月（pp. 293～412）／『河合榮治郎全集』6，社会思想社，1968年4月（pp. 47～137）→II-136，III-188
- 33 新明正道『修正派マルクス主義』鱒書房（社会思想新書7），1947年2月（156p.）
- 34 大野英二「改良主義の窮乏化理論」『経済論叢』〔京都大〕63-3・4，1949年4月（pp. 24～51）／岸本英太郎編『資本主義と貧困』日本評論新社（社会科学双書E-14），1957年1月（pp. 1～35）→II-142，149
- 35 平井新「ベルンシュタインの“社会主義の諸前提と社会民主党の任務”」大河内一男・石上良平・平井新・小林珍雄・中村哲編『マルクスに代る学説・20集』自由国民社，1950年11月（pp. 155～172）→I-36，37，II-147
- 36 久保田明光「修正主義におけるイギリス型とドイツ型」『マルクスに代る学説・20集』〔→I-35〕（pp. 295～303）
- 37 宮川実「マルクス主義の基本的な考え方」『マルクスに代る学説・20集』〔→I-35〕（pp. 321～344）→IV-54
- 38 長坂聡「ベルンシュタインの『金融資本論』批判をめぐって」『社会科学研究』〔東京大〕4-4，1954年5月（pp. 128～134）→IV-65
- 39 広田司朗「ベルンシュタインの財政思想」(1)(2)『山口経済学雑誌』5-11・12，1955年3月（pp. 42～59）. 6-1・2，1955年5月（pp. 39～57）
- 40 中條毅「修正派マルクス主義と労働組合——ベルンシュタイン主義の批判的考察」『人文学』〔同志社大〕19，1955年8月（pp. 24～71）
- 41 石川準十郎「修正マルクス主義論考——ベルンシュタインのマルクス主義修正論」『早稲田政治経済学雑誌』148，1957年12月（pp. 65～84）
- 42 中村建治「相対的窮乏化理論と絶対的窮乏化理論」向坂逸郎編『マルクスの批判と反批判』（マルクス・エンゲルス選集16）新潮社，1958年3月（pp. 161～178）→I-43，II-158，159，III-211
- 43 岡茂男「『修正派』論争——工業における資本主義の発達」『マルクスの批判と反批判』〔→I-42〕（pp. 255～279）
- 44 竹内良知「修正主義」山崎正一・岩崎武雄・原佑・末木剛博編『講座現代の哲学』4（マルクス主義），有斐閣，1958年6月（pp. 71～105）
- 45 林健太郎「修正主義の現代的意義」『社会思想研究』11-1，1959年1月（pp. 3～12）
- 46 市井三郎「漸進主義の再認識——ベルンシュタインの復元をめぐって」『思想の科学』30，1961年6月（pp. 40～46）
- 47 宇野弘蔵「修正派ベルンシュタインの主張に対するカウツキーの正統派的反駁について」『経済学方法論』（経済学大系1），東京大学出版会，1962年2月（pp. 65～79）／『宇野弘蔵著作集』9，岩波書店，1974年6月（pp. 62～76）→II-167
- 48 熊谷一男「ベルンシュタイン『修正主義論』の再検討——帝国主義論史との関連で」井汲卓一・佐藤昇・長洲一二・水田洋編『講座現代のイデオロギー』4（現代資本主義とマルクス主義），三一書房，1962年10月（pp. 109～146）
- 49 福田豊「改良主義は何故発生したか——ベルンシュタインと独逸社会民主党の道」『社会主義』134，1962年11月（pp. 40～47）
- 50 浅井啓吾「ドイツ社会民主党史研究序説——世紀転換期における正統主義と修正主義をめぐって」(以下)『経済系』〔関東学院大〕57，1963年7月（pp. 42～63）. 59・60，1964年3月（pp. 53～82）→II-168
- 51 戸原四郎「修正主義論争」遊部久蔵・大内力・玉野井芳郎・大島清・杉本俊朗・三宅義夫編『資本論講座』7（恐慌資本論以後），青木書店，1964年3月（pp. 273～282）→IV-121
- 52 水田洋「ヨーロッパ社会主義思想におけるマルクス主義の位置——ひとつの試論」『思想』486，1964年12月（pp. 2～12）→II-171
- 53 清水多吉「修正主義の歴史的源流」『季刊社会科学』7，経済往来社，1965年5月（pp. 170～179）
- 54 池上惇「資本主義経済の『適応能力』理論の発生過程——ベルンシュタインとローザの論争によせて」『経済論叢』96-4，1965年10月（pp. 48～63）→III-240
- 55 広田司朗「団結の理想と分裂の現実」河野健二編『マルクスと社会主義者』（思想の歴史9），平凡社，1966年1月（pp. 327～372）→II-174，III-242

- 56 水田洋「ベルンシュタインとカウツキー」『マルクス主義入門』光文社、1966年2月／社会思想社（現代教養文庫712）、1971年2月（pp. 84～102）→II-175
- 57 清水幾太郎「社会主義者たち」『現代思想』上、岩波全書266、1966年4月（pp. 66～100）
- 58 浅井啓吾「第1次ロシア革命とドイツ社会民主党——正統派と修正派のロシア革命論」『経済系』69、1966年6月（pp. 91～98）→II-176
- 59 西川正雄「ドイツ第2帝政における社会民主党——『修正主義論争』の背景」日本政治学会編『年報政治学 西欧世界と社会主義』、岩波書店、1966年9月（pp. 55～88）→II-177
- 60 美馬孝人「ベルンシュタイン論争と窮乏化理論」『北大経済学』10、1966年11月（pp. 82～121）→II-180
- 61 長坂聡「ベルンシュタインと修正主義の背景」『唯物史観』4、1967年4月（pp. 131～140）
- 62 久松俊一「ベルンシュタイン社会経済思想の生成——『修正主義』の形成過程(1)」『経済論叢』99-5、1967年5月（pp. 58～77）
- 63 上林貞治郎「『資本論』と修正主義「理論」」『経済』37、1967年5月（pp. 231～250）→II-181、IV-137
- 64 久松俊一「ベルンシュタインの社会観——『修正主義』の形成過程(2)」『経済論叢』100-1、1967年7月（pp. 39～58）
- 65 古沢友吉「『資本論』論争の導火線——ベルンシュタイン＝カウツキー論争」越村信三郎・石原忠男・古沢友吉編『資本論の展開——批判・反批判の系譜』同文館、1967年12月（pp. 23～42）→II-183、III-257
- 66 伊藤定良「1910年におけるドイツ社会民主党の党内抗争」『歴史学研究』371、1971年4月（pp. 1～19）→II-192、III-286
- 67 東中野修「ドイツ社会民主党と修正主義論争——改革と革命の問題」『鹿大史学』19、1971年12月（pp. 59～75）→II-193、III-290
- 68 倉田稔「『金融資本論』の成立——ヒルファディングのベルンシュタイン修正主義批判」『思想』585、1973年3月（pp. 105～126）／『金融資本論の成立』青木書店、1975年7月（第1章）→IV-188
- 69 村山高康「ベルンシュタイン思想の再検討」『労調時報』627、1973年4月*
- 70 関嘉彦「ベルンシュタインとイギリス思想」『現代思想』7（月報）〔→I-9〕1974年2月（pp. 1～3）→I-71、I-72
- 71 正村公宏「マルクス主義における科学と信仰」〔→I-70〕（pp. 4～7）
- 72 村瀬興雄「ベルンシュタインの晩年と社会民主主義」〔→I-70〕（pp. 7～10）
- 73 福留久大「イーヴリングとベルンシュタイン——『賃銀、価格および利潤』の序文を巡って」『経済学研究』〔九州大〕40-3、1974年10月（pp. 109～125）
- 74 升味準之輔「ソレル・ベルンシュタイン・ルクセンブルク——ユートピアと権力（その2）」『法学会雑誌』〔東京都立大〕16-1、1975年8月（pp. 77～184）→III-320
- 75 松岡利道「帝国主義論の学説的研究——ドイツ社会民主党を中心に」『経済学史学会年報』13、1975年11月（pp. 1～12）→II-212、III-325、IV-214
- 76 市原健志「SPDの資本主義の発展段階認識と対外政策——19世紀末『修正主義論争』の帝国主義論史上における意義についての一考察」『商学論纂』〔中央大〕18-1、1976年5月（pp. 43～79）→II-214
- 77 関嘉彦「ベルンシュタインの英国生活」(以下)『同盟』222、1977年1月（pp. 29～36）、223、1977年2月（pp. 31～39）
- 78 淡路憲治「『崩壊論』とベルンシュタイン——晩年のエンゲルスとベルンシュタイン」入江節次郎・星野中編『帝国主義研究』II、御茶の水書房、1977年3月（pp. 91～137）→II-220、III-329、IV-234
- 79 加藤誠一・渡辺俊三「E. ベルンシュタインを中心とする修正主義論争の再検討——中小企業の存続要因にかんする視角からの一考察」『経営経済』〔大阪経済大〕13、1977年3月（pp. 1～17）
- 80 相田慎一「修正主義論争——いわゆる崩壊理論をめぐる」古沢友吉編『講座経済学史』4（マルクス経済学の発展）、同文館、1977年4月（pp. 45～67）→II-221、III-330、IV-237
- 81 山本晴義「ベルンシュタイン主義と新カント主義」(1)(2)『大阪経大論集』126、1978年11月（pp. 84～100）、127・128、1979年3月（pp. 311～323）
- 82 関嘉彦「ベルンシュタインと民主社会主義」(1)～(10)『革新』100、1978年11月（pp. 90～103）～118、1980年5月（pp. 194～202）
- 83 渡部恒夫「社会政策論とローザ・ルクセンブルクによるベルンシュタイン理論の批判」(1)(2)『鹿児島経大論集』21-1、1980年4月（pp. 1～21）、21-2、1980年7月（pp. 31～58）→III-346

- 84 関嘉彦『ベルンシュタインと修正主義』早稲田大学出版部，1980年10月（viii，264，14p.）
 85 福岡利裕「ドイツ社会民主党における修正主義論争」『西洋史学』122，1981年11月（pp. 1～20）→II-236，III-351

II カウツキー邦語文献目録

A カウツキー邦訳著作論文目録

※配列および原タイトルの表記は，W. Blumenberg, *Karl Kautskys literarisches Werk* を参考にし，原タイトル末尾にその通しナンバーを付けた。

Die Entstehung des Christenthums, NZ, 3. Jg., 1885, S. 481-99, 529-45. [351]

- 1 喜多野清一訳「基督教の成立」岩波文庫，1929年12月（pp. 47～115）

„Das Elend der Philosophie” und „Das Kapital”, NZ, 4. Jg., 1886, S. 7-19, 49-58, 117-29, 157-65. [381]

- 2 赤松五百麿抄訳「マルクス資本論第2巻略解」(1)(2)『我等』8-3，1926年3月（pp. 67～77）. 8-4，1926年4月（pp. 61～75）

Karl Marx' ökonomische Lehren, Stuttgart 1887. [417]

- 3 高島素之抄訳「資本論解説」『新社会』3-6，1917年2月（pp. 47～55）～*
 4 高島素之訳『マルクス資本論解説』売文社出版部，1919年5月（41，12，462p.）
 5 高島素之訳『マルクス資本論解説』三田書房，1919年5月（41，12，462p.）
 6 高島素之訳『マルクス資本論解説』大鐘閣，1921年*
 7 高島素之訳『改訂資本論解説』而立社，1924年7月（22，15，426p.）
 8 高島素之訳『改訂資本論解説』アテネ書院，1925年6月（22，15，426p.）
 9 石川準一郎訳述『マルクス経済学入門』新潮社（社会哲学新学説大系9），1925年7月（3，8，236p.）
 10 高島素之訳『改訂資本論解説』改造社，1927年3月（17，10，308p.）
 11 佐多忠隆訳『新版資本論解説』改造社，1932年10月（15，7，397p.）
 12 大里伝平訳『資本論解説』岩波文庫，1933年11月（369p.）
 13 佐藤栄訳『資本論解説』彰考書院新社，1946年10月（1，14，6，402p.）

Friedrich Engels, *Osterreichischer Arbeiter-Kalender für das Jahr 1888*, Brünn 1887, S. 29-47. (2) *Der Sozialdemokrat*, Zurich Nr. 45-50. / *Friedrich Engels. Sein Leben, sein Wirken, seine Schriften*, Berlin 1908. (44S.) [437, 615, 1014]

- 14 堺利彦・山川均抄訳「エンゲルス伝」『マルクス伝 附エンゲルス伝』大鐘閣（レッド・カウア叢書1），1920年1月（付録 pp. 1～28）
 15 大内兵衛訳「フリードリッヒ・エンゲルス」(1)～(3)『我等』8-3，1926年3月（pp. 52～58）. 8-4，1926年4月（pp. 43～60）. 8-5，1926年5月（pp. 41～56）
 16 大内兵衛訳「フリードリッヒ・エンゲルス 彼の生涯，彼の活動，彼の著作」櫛田民蔵・大内兵衛訳『マルクス・エンゲルス評伝』同人社（我等叢書1），1926年7月（pp. 91～175）

Thomas More und seine Utopie. Mit einer historischen Einleitung, Stuttgart 1888. 6. Aufl., Berlin 1926. [454]

- 17 高橋正男訳『トマス・モアとそのユートピア』聚英閣，1928年5月*
 18 渡辺義晴訳『トマス・モアのそのユートピア』東京教育書林，1957年10月（9，366，6 p.）
 19 渡辺義晴訳『トマス・モアとユートピア』法政大学出版局，1969年10月（393，9 p.）

Die Klassegegensätze von 1789, Stuttgart 1889. 2. Aufl. *Die Klassegegensätze im Zeitalter der Französischen Revolution*, Stuttgart 1908. [483, 1016]

- 20 宗道太訳『フランス革命時代に於ける階級対立』叢文閣（マルクス主義名著叢書3），1928年9月（1，5，115p.）
- 21 マルクス書房編集部抄訳「サンキュロット派」『マルクス学教科書』5，マルクス書房，1929年4月（pp. 90～104）
- 22 日高明三訳『フランス革命時代の階級対立』アカギ書房，1946年10月（127p.）
- 23 堀江英一・山口和男訳『フランス革命時代における階級対立』岩波文庫，1954年5月（145p.）

Das Erfurter Programm in seinem grundsätzlichen Teil erläutert, Stuttgart 1892. 5. Aufl., Stuttgart 1904. [551]

- 24 河上肇抄訳「社会主義と各種階級の人々」(1)(2)『社会問題研究』11，1919年12月（pp. 23～32）. 13，1920年3月（pp. 17～27）
- 25 三輪寿壯訳『社会民主党綱領——エルフルト綱領』大鏡閣，1923年2月（2，21，5，359p.）
- 26 三輪寿壯訳『社会民主党綱領解説——エルフルト綱領』弘文堂（社会思想叢書3），1925年6月（4，28，6，457p.）
- 27 三輪寿壯訳『社会民主党綱領解説（エルフルト綱領）』而立社，1925年*
- 28 マルクス書房編集部抄訳「小生産の滅亡」『マルクス学教科書』1，1927年*
- 29 マルクス書房編集部抄訳「ルンペンプロレタリアート」『マルクス学教科書』4，1929年4月（pp. 89～92）
- 30 赤松克麿訳「エルフルト綱領」『社会思想全集』12，平凡社，1929年8月（pp. 1～280）→II-65，102，106
- 31 三輪寿壯訳『エルフルト綱領解説』改造文庫1-105，1930年9月〔覆刻版，1977年〕（295p.）
- 32 都留大治郎訳「エルフルト綱領解説」『世界大思想全集』2-14，河出書房，1955年9月（pp. 1～167）→II-83，115

Die Vorläufer des Neueren Sozialismus, Stuttgart 1895. 2. Aufl., 1909. [614]

- 33 マルクス書房編集部抄訳「原始基督教の共産主義」『マルクス学教科書』5，1929年4月（pp. 7～17）/同抄訳「グツシストの戦争」（pp. 29～40）
- 34 栗原佑訳『中世の共産主義』法政大学出版局，1980年7月（xvii，360，xiii p.）

Die Intelligenz und die Sozialdemokratie, NZ, 13. Jg., 2. Bd., 1895, S. 10-16, 43-49, 74-80. [622]

- 35 鳥海篤助訳「インテリゲンチヤ論」向坂逸郎・鳥海篤助訳『インテリゲンチヤ——その特質とその将来』大衆公論社，1930年6月（pp. 1～52）/初出：（抄訳）『社会科学』4-3，1928年11月*

Die materialistische Geschichtsauffassung und der psychologische Antrieb, NZ, 14. Jg., 2. Bd., 1896, S. 652-59. [643]

- 36 マルクス書房編集部抄訳「自然—人間生体—社会」『マルクス学教科書』3，1928年10月（pp. 162～163）

Konsumvereine und Arbeiterbewegung, Wien 1897. [649]

- 37 村山重忠訳『消費組合と労働運動』叢文閣，1928年4月（1，2，57p.）

Was will und kann die materialistische Geschichtsauffassung leisten?, NZ, 15. Jg., 1. Bd., 1897, S. 213-18, 228-38, 260-71. [653]

- 38 マルクス書房編集部抄訳「技術の発達」『マルクス学教科書』3，1928年10月（pp. 139～142）
- 39 同抄訳「社会に於ける個人の役割」『マルクス学教科書』6，1929年6月（pp. 180～188）

Ältere und neuere Kolonialpolitik, NZ, 16. Jg., 1. Bd., 1898, S. 769-81, 801-16. [675]

- 40 入江節次郎・中川清訳「新旧植民地政策」(1)(2)『経済学論叢』〔同志社大〕25-1・2，1976年12月（pp. 88～113）. 25-3・4，1977年4月（pp. 199～234）

Die Agrarfrage. Eine Übersicht über die Tendenzen der modernen Landwirtschaft und die Agrarpolitik der Sozialdemokratie, Stuttgart 1899. [687]

- 41 河西〔太郎〕抄訳「社会主義と農業小経営」『社会思想』4-12, 1925年12月 (pp. 40~48)
- 42 河西〔太郎〕抄訳「マルクス主義的農業問題研究方法」『社会科学』3-1, 1927年1月 (pp. 238~242)
- 43 平田良衛抄訳「近代農業の資本主義的特質」同訳編『マルクス主義地代論——附土地価格』共生閣, 1930年6月 (pp. 1~71)
- 44 プロレタリア科学研究所・農業問題研究会訳『農業問題』全3冊, 鉄塔書院, (上)1931年5月(8, 2, 216p.). (中)1931年9月(2, 217~501p.) (下)1933年3月*
- 45 向坂逸郎訳『農業経済学』中央公論社, 1932年12月(3, 7, 7, 734p.)
- 46 向坂逸郎訳『農業問題——近代の農業の諸傾向の概観と社会民主党の農業政策』岩波文庫, 1946年10月(395p.). 1946年12月(368, 14p.)
- 47 山崎春成・崎山耕作訳『農業問題』(1)国民文庫, 1955年7月(377p.)

Bernstein und das sozialdemokratische Programm. Eine Anti-Kritik, Stuttgart 1899. [688]

- 48 安部浩訳述『マルキシズムの擁護』新潮社(マルクス思想叢書8), 1927年1月(3, 2, 346p.)
- 49 山川均訳「マルキシズム修正の駁論」『世界大思想全集』47, 春秋社, 1928年10月 (pp. 1~291)
- 50 松井隆一抄訳「恐慌理論」『マルクス恐慌理論』叢文閣, 1931年6月 (pp. 173~208) →II-59, 88
- 51 松崎敏太郎抄訳「恐慌理論」『恐慌論』叢文閣, 1935年11月 (pp. 173~208) →II-60, 89

Handelspolitik und Sozialdemokratie. Populäre Darstellung der handelspolitischen Streitfragen, Berlin 1901. 2. umgearbeitete Aufl., Berlin 1911. [739]

- 52 柴田固弘訳「貿易政策と社会民主主義」【金沢大学法文学部論集】19, 1973年8月(pp. 87~126). 24, 1978年2月(pp. 99~166)

Akademiker und Proletarier, NZ, 19. Jg., 2. Bd., 1901, S. 89-91. [754]

- 53 向坂逸郎訳「学識者とプロレタリア」【インテリゲンチヤ】〔→II-35〕(pp. 53~63)

Die soziale Revolution, Berlin 1902. 2. Aufl., 1907. [778]

- 54 マルクス書房編集部抄訳「階級的対立の緩和」『マルクス学教科書』1, 1927年*
- 55 松本信夫訳「社会革命論」『社会革命論』白揚社, 1928年7月 (pp. 3~221)
- 56 マルクス書房編集部抄訳「新・旧の中間階級」『マルクス学教科書』4, 1929年4月 (pp. 92~101) / 「社会革命の概念」(pp. 137~140)
- 57 同抄訳「進化と革命」『マルクス学教科書』7, 1929年9月 (pp. 46~53)
- 58 同抄訳「未来の超人」『マルクス学教科書』9, 1929年10月 (pp. 51~53)

Krisentheorien, NZ, 20. Jg., 2. Bd., 1902, S. 37-47, 76-81, 110-18, 133-43. [792]

- 59 松井隆一訳「恐慌諸理論」『マルクス恐慌理論』〔→II-50〕(pp. 1~88)
- 60 松崎敏太郎訳「恐慌諸理論」『恐慌論』〔→II-51〕(pp. 1~88)

Allerhand Revolutionäres, NZ, 22. Jg., 1. Bd., 1904, S. 588-98, 620-27, 652-57, 685-95, 732-40. [850]

- 61 山本統敏他抄訳「革命のさまざまな可能性」【第2インターの革命論争】(マルクス主義革命論史2), 紀伊国屋書店, 1975年5月 (pp. 156~163) →II-68, 84, 86

Ethik und materialistische Geschichtsauffassung. Ein Versuch, Stuttgart 1906. [930]

- 62 堺利彦抄訳「唯物論の倫理」(1)~(4)「進化論の倫理」「マルクス派の倫理」(1)~(3)「社会的本能有効の範囲」「道徳律の由来」【新仏教】13-1~13-12, 1912年1月 (pp. 26~32) ~1912年12月 (pp. 1193~1203)
- 63 堺利彦訳『社会主義倫理学』丙午出版社, 1913年1月(5, 4, 8, 3, 274p.)
- 64 由利英一訳『倫理と唯物史観』共生閣, 1928年3月(14, 3, 208p.)
- 65 堺利彦訳「倫理と唯物史観」『社会思想全集』12〔→II-30〕(pp. 511~668)
- 66 堺利彦訳『倫理と唯物史観』改造文庫1-76, 1930年7月(176p.)

67 堺利彦訳『倫理と唯物史観』彰考書院, 1947年5月(8, 198p.)

Triebkräfte und Aussichten der russischen Revolution, NZ, 25. Jg., 1. Bd., 1907, S. 284-90, 324-33. [979]

68 山本統敏他訳「ロシア革命の推進力と展望」『第2インターの革命論争』〔→II-61〕(pp. 329~343)

Sozialismus und Kolonialpolitik, Berlin 1907. [971]

69 細川嘉六抄訳「社会主義と植民政策」『大原社会問題研究所雑誌』2-1, 1924年4月(pp. 383~403)

Der Ursprung des Christentums. Eine historische Untersuchung, Stuttgart 1908. [1013]

70 近藤宗男訳『基督教の起原』全2冊, 啓明社, (上)1928年3月(2, 3, 300p.) (下)1928年6月(3, 301~646p.)

71 マルクス書房編輯部抄訳「マルクス主義歴史観の客観主義」『マルクス学教科書』4, 1929年4月(pp. 60~66)

72 同抄訳「イスラエルの階級闘争」『マルクス学教科書』5, 1929年4月(pp. 3~7)

73 同抄訳「商業と哲学」『マルクス学教科書』6, 1929年6月(pp. 86~96)

74 近藤宗男訳『基督教の発生と古代無産階級』社会評論社, 1929年11月*

75 栗原佑訳『キリスト教の起源 歴史的研究』法政大学出版局, 1975年8月(viii, 516, viii p.)

Die historische Leistung von Karl Marx. Zum 25. Todestage des Meisters, Berlin 1908. 2. Aufl., Berlin 1919. [1015]

76 榊田民蔵訳「文化史上のマルクス」(1)~(7)「マルクス派社会主義の思想的背景」『我等』1-13, 1919年11月(pp. 54~58) ~2-7, 1920年7月(pp. 45~54)

77 鷺野隼太郎抄訳「マルクスの歴史的貢献」『局外』3, 1923年7月*

78 榊田民蔵訳「カール・マルクスの歴史的貢献」『マルクス・エンゲルス評伝』〔→II-16〕(pp. 1~90)

79 マルクス書房編輯部抄訳「イギリス経済学, フランス革命及びドイツ哲学のシンテーゼとしてのマルキシズム」『マルクス学教科書』3, 1928年10月(pp. 33~42)

80 同抄訳「社会主義の理論とプロレタリア闘争」『マルクス学教科書』2, 1928年11月*

81 同抄訳「科学の発展におけるマルクス主義の任務」『マルクス学教科書』9, 1929年10月(pp. 3~16) / 「総合としてのマルクス主義」(pp. 49~51)

Der Weg zur Macht. Politische Betrachtungen über das Hineinwachsen in die Revolution, Berlin 1909. 2. Aufl., 1910. 3. Aufl., 1920. [1052]

82 松本信夫訳「権力への途——××への生長に関する政治的考察」『社会革命論』〔→II-55〕(pp. 223~407)

83 奥田八二訳「権力への道——革命への熟成に関する政治的考察」『世界大思想全集』2-14〔→II-32〕(pp. 169~271)

84 山本統敏他抄訳「権力への道」『第2インターの革命論争』〔→II-61〕(pp. 456~468)

Vermehrung und Entwicklung in Natur und Gesellschaft, Stuttgart 1910. [1115]

85 松下芳男訳述『マルキシズムの人口論』新潮社(マルクス思想叢書5), 1927年7月(2, 2, 362p.)

Was nun?, NZ, 28. Jg., 2. Bd., 1910, S. 33-40, 68-80. [1125]

86 山本統敏他訳「いまや何を」『第2インターの革命論争』〔→II-61〕(pp. 360~380)

Finanzkapital und Krisen, NZ, 29. Jg., 1. Bd., 1911, S. 764-72, 797-804, 838-46, 874-83. [1144]

87 笠信太郎訳『金融資本と恐慌——ヒルファディング「金融資本論」批判』叢文閣, 1927年6月(2, 88p.)

88 松井隆一抄訳「恐慌」『マルクス恐慌理論』〔→II-50〕(pp. 209~266)

89 松崎敏太郎抄訳「恐慌」『恐慌論』〔→II-51〕(pp. 209~266)

Gold, Papier und Ware, NZ, 30. Jg., 1. Bd., 1912, S. 837-47, 886-93. [1182]

90 笠信太郎訳「金, 貨幣及び商品」『金と物価——一貨幣価値論争』同人社(我等叢書別冊2), 1927年8月(pp. 63~122)

91 向坂逸郎訳「金, 貨幣及び商品」向坂逸郎・岡崎次郎訳『貨幣論』改造社, 1934年4月(pp. 217~267) →II-93,

- Die Wandlungen der Goldproduktion und der wechselnde Charakter der Teuerung*, Stuttgart 1913. Austin Lewis (tr.), *The high cost of living. Changes in gold-production and the rise in prices*, Chicago 1915. [1207]
- 92 市川正一訳「資本主義と物価問題」【資本主義と物価問題】早稲田泰文社, 1924年6月 (pp. 1~150)
- 93 岡崎次郎訳「金生産と物価騰貴」【貨幣論】〔→II-91〕(pp. 113~215)
- Der Imperialismus, *NZ*, 32. Jg., 2. Bd., 1914, S. 908-22. [1265]
- 94 波多野真訳「帝国主義」【帝国主義論】創元文庫, 1953年11月 (pp. 5~35) →II-97, 98
- 95 波多野真訳「カウツキーの帝国主義論」【武蔵大学論集】13-5, 1966年1月 (pp. 157~180)
- 96 T. I.抄訳「超帝国主義論」【社会主義政治経済研究所研究資料】14-4, 1970年4月 (pp. 28~34)
- Zwei Schriften zum Umlernen, *NZ*, 33. Jg., 2. Bd., 1915, S. 33-42, 71-81, 107-16, 138-46. [1292]
- 97 波多野真抄訳「ハインリッヒ・クノーの帝国主義論批判」【帝国主義論】〔→II-94〕(pp. 37~80)
- Der imperialistische Krieg, *NZ*, 35. Jg., 1. Bd., 1917, S. 449-54, 475-87. [1389]
- 98 波多野真訳「帝国主義戦争」【帝国主義論】〔→II-94〕(pp. 81~117)
- Sozialdemokratische Bemerkungen zur Übergangswirtschaft*, Leipzig 1918. [1429]
- 99 高村雪夫抄訳【マルクス主義貨幣論】労農書房, 1933年*
- 100 山田秀抄訳「貨幣概論」【貨幣論】〔→II-91〕(pp. 1~112)
- Demokratie oder Diktatur*, Berlin 1918. [1430]
- 101 高木友三郎抄訳「民主制乎独裁制乎」【批評】17, 1920年7月*
- 102 赤松克麿訳「民主主義か独裁主義か」【社会思想全集】12〔→II-30〕(pp. 281~390)
- Die Diktatur des Proletariats*, Wien 1918. H. J. Stenning (tr.), *The dictatorship of the proletariat*, London 1920. [1431]
- 103 山川均抄訳・註解・批評「カウツキーの労農政治反対論」【社会主義研究】3-2, 1921年3月 (pp. 46~66)
- 104 来原慶助訳補【民主政治と独裁政治】広文館, 1921年3月 (10, 7, 213p.)
- Die Sozialisierung der Landwirtschaft*, Berlin 1919. [1462]
- 105 河西太一郎訳「農業社会化論」【農業の社会化】アルス, 1923年6月 (pp. 1~122) / 【農業の社会化 (改訂版)】同人社, 1925年6月 (pp. 1~140)
- 106 笠置暹訳「農業理論」【社会思想全集】12〔→II-30〕(pp. 391~510)
- Was ist Sozialisierung?*, 1919* [1463]
- 107 [無署名]「社会化とは何か」(1)~(4)【世界週報】27-34, 1946年10月15日 (pp. 49~50). 27-36, 1946年11月15日 (pp. 23~25). 27-37, 1946年12月1日 (pp. 26~27). 27-38, 1946年12月15日 (pp. 22~23)
- Demokratie und Demokratie, *Der Kampf*, 13. Jg., 1920, S. 209-14. [1496]
- 108 高畠素之訳「社会主義とデモクラシー」【解放】4-2, 1922年2月 (pp. 62~73)
- Eine Schrift über den Bolschewismus, *Der Kampf*, 13. Jg., 1920, S. 260-65. [1497]
- 109 高畠素之訳「階級独裁と政党独裁」【解放】4-3, 1922年3月 (pp. 2~19)
- Wer ist ein Arbeiter?, *Der Kampf*, 13. Jg., 1920, S. 443-50. [1499]
- 110 高畠素之訳「労働者とは誰か?——普通選挙と労働者選挙」【解放】4-6, 1922年5月 (pp. 2~16)

- Rosa Luxemburg, Karl Liebknecht, Leo Jogiches. Ihre Bedeutung für die deutsche Sozialdemokratie. Eine Skizze, Berlin 1921. [1515]*
- 111 高村浪夫抄訳「ローザ・ルクセンブルグ——彼女の独逸社会民主党に対する意義」【ローザ・ルクセンブルグ】弘文堂, 1927年7月 (pp. 62~78)
- Die proletarische Revolution und ihr Programm, Berlin-Stuttgart 1922. Englisch übers., London-New York 1925. [1533]*
- 112 高橋正男訳【無産階級革命とその綱領】金星堂, 1927年10月 (13, 5, 459p.)
- Wilhelm II., gezeichnet von Bismarck, *Arbeiter-Zeitung*, Nr. 50, 52, 1922. [1546]
- 113 〔無署名〕「ビスマルクの見たるギルヘルム二世」【改造】4-3, 1922年3月 (pp. 117~126)
- Die Marxsche Staatsauffassung im Spiegelbild eines Marxisten beleuchtet, Jena 1923. [1562]*
- 114 〔無署名〕抄訳「マルクスの国家観」【社会科学】2-6, 1926年6月 (pp. 110~119)
- 〔Selbstbiographie〕. *Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen, Leipzig 1924. [1580]*
- 115 玉野井芳郎訳「自伝」【世界大思想全集】2-14 [→II-32] (pp. 273~303)
- Eduard Bernstein zu seinem fünfundsiebzigsten Geburtstag, *Die Gesellschaft*, 2. Jg., 1. Heft, 1925, S. 1-22. [1606]
- 116 〔無署名〕「七十五回の誕辰を迎ふるエドワルド・ベルンシュタイン」【社会政策時報】56, 1925年5月 (pp. 198~219)
- Die materialistische Geschichtsauffassung, 2Bde., Berlin 1927. (Erster Band. Natur und Gesellschaft) [1627]*
- 117 藤井梯・佐多忠隆訳【唯物史観 (第1巻自然と社会—第1書精神と世界)】日本評論社, 1931年2月 (6, 16, 6, 250p.)
- 118 佐多忠隆訳【唯物史観 (第1巻自然と社会—第3書人間社会)】日本評論社, 1932年6月 (1, 5, 644p.)
- 119 佐多忠隆訳【唯物史観 (第1巻自然と社会—第2書人間性)】日本評論社, 1933年5月 (1, 4, 464p.)
- Der Bolschewismus in der Sackgasse, Berlin 1930. B. Pritchard (tr.), Bolshevism at a deadlock, London 1931. [1677]*
- 120 小池四郎訳【五ヶ年計画立往生——サヴィエート・ロシアの革命の実験は成功したか?】先進社, 1931年7月 (294 p.)
- 121 国民同志会市民講座部編輯部抄訳「産業五年計画は失敗する」【公民講座】81, 1931年8月 (pp. 4~11)
- 122 納武津抄訳「ボルシエヴィズムの破綻」【日本読書協会会報】130, 1931年8月 (pp. 79~132)
- Über Sozialdemokratie und Kommunismus. Hrsg. von David Shub und Joseph Shaplen, München 1948. do. (ed. and tr. by), Social democracy versus communism, New York 1946. [1715]*
- 123 直井武夫訳【社会民主主義と共産主義の対決】酣燈社, 1951年11月 (163p.)
- Aus der Frühzeit des Marxismus. Engels' Briefwechsel mit Kautsky herausgegeben und erläutert, Prag 1935. [1756]*
- 124 岡崎次郎訳「カウツキーあてのエンゲルスの手紙——1884年7月までの12通」「カウツキーあてのエンゲルスの手紙——1884年7月から1885年12月迄の18通」【唯物史観】2, 1948年4月 (pp. 100~111). 3, 1948年9月 (pp. 130~143)
- 125 岡崎次郎訳【エンゲルスのカウツキーへの手紙】岩波文庫, 1950年2月 (382, 8 p.)

B カウツキー邦語研究論文目録

- 126 室伏高信「カウツキーとベルンシュタイン」1921年〔→I-21〕
- 127 小島幸治「カウツキーの『修道院の共産主義』を読む」『三田学会雑誌』17-8, 1923年8月 (pp. 88~113)
- 128 小泉信三「マルクシズムとマルクス修正主義」1926年9月〔→I-27〕
- 129 河西太一郎「カウツキーの農業理論及び政策」河西太一郎・向坂逸郎・猪俣津南雄『マルクス経済学説の発展』上, 改造社(経済学全集26), 1929年6月 (pp. 70~130)
- 130 阿部勇「カウツキー著『唯物史観』の一節——階級的分裂生成についてのエンゲルス説に対するカウツキーの批判」『法政大学論集』4-3, 1929年9月 (pp. 130~168)
- 131 矢内原忠雄「超帝国主義論に就て」『経済学論集』8-4, 1930年9月 (pp. 1~44) / 『帝国主義研究』白日書院, 1948年4月 (pp. 67~105) / 『矢内原忠雄全集』4, 岩波書店, 1963年9月 (pp. 71~108)
- 132 林癸未夫「カウツキーの『行詰ったボルシェヴィキズム』を読む」『早稲田政治経済学雑誌』23, 1931年〔月記載なし〕 (pp. 147~162)
- 133 小泉信三「カウツキー著『ボルシェヴィキズムの行詰り』評論」『社会政策時報』131, 1931年8月 (pp. 1~13)
- 134 大内兵衛「カウツキー『農業問題』」『中央公論』1933年2月* / 『経済学散歩』思索社, 1948年7月. 黄土社, 1951年6月 (pp. 117~123) / 『大内兵衛著作集』9, 岩波書店, 1975年8月 (pp. 263~267)
- 135 内藤藪夫「カール・カウツキー文献」『大原社会問題研究所雑誌』10-3, 1933年11月 (pp. ii, 1~52)
- 136 河合榮治郎「独逸社会民主党とマルクシズムの修正」1934年6月〔→I-32〕
- 137 大内兵衛「ドイツ社会民主党の農業綱領について」『月刊大原社会問題研究所雑誌』3-1, 1936年1月 (pp. 31~55)
- 138 宇野弘蔵「社会党の関税論——1898年ドイツ社会民主党大会に於ける論議を中心として」『経済学』〔東北帝大〕4, 1936年5月 (pp. 1~52) / 『農業問題序説』改造社, 1947年11月 (pp. 126~188) / 『農業問題序説』増補版, 青木書店, 1965年6月 (pp. 199~250) / 『宇野弘蔵著作集』8, 岩波書店, 1974年5月 (pp. 164~213)
- 139 大形太郎「『修正主義』の貨幣理論——カウツキー. ヒルファーディング」『マルクス主義貨幣論』岩崎書店, 1948年1月 (pp. 233~249)
- 140 大内力「カール・カウツキー『労働者保護と農民保護』」『社会科学研究』〔東京大〕1, 1948年2月 (pp. 149~156)
- 141 鈴木鴻一郎「カウツキーの地代論——マルクス絶対地代論の歪曲について」『人文』2-2, 1948年9月 (pp. 47~66)
- 142 大野英二「改良主義の窮乏化理論」1949年4月〔→I-34〕
- 143 暉峻衆三「カウツキーの生涯と学説」『農業と経済』15-12, 1949年12月 (pp. 27~34)
- 144 関嘉彦「革命・独裁・民主主義——マルクス, カウツキー主義批判」『理想』199, 1949年12月 (pp. 32~48) →III-194
- 145 新島繁「トマス・モアとそのユトピア」『社会科学文献解題』I, 春秋社, 1950年8月 (pp. 245~249) →II-146, III-197, IV-53
- 146 新島繁「農業問題」『社会科学文献解題』I〔→II-145〕 (pp. 278~283)
- 147 岡崎次郎「カウツキーのプロレタリアートの独裁」『マルクスに代る学説・20集』〔→I-35〕 (pp. 137~154)
- 148 岡崎次郎「カウツキー」『社会科学講座』2 (社会科学の諸系譜), 弘文堂, 1950年11月 (pp. 163~170)
- 149 近江谷左馬之介「二つの窮乏化理論——カウツキーとトロコンスキー」『社会科学研究』3-1, 1951年9月 (pp. 110~113) / 『資本主義と貧困』〔→I-34〕 (pp. 101~108)
- 150 松村憲一「カウツキー『帝国主義論』の基礎」『政経学部研究年報』〔学習院大〕1, 1953年12月 (pp. 183~214)
- 151 服部文男「カウツキー『超帝国主義』論批判」『経済学』〔東北大〕30・31, 1954年3月 (pp. 167~197)
- 152 静田均「カウツキー帝国主義論の原型——最初の論文について」『経済論叢』〔京大〕75-3, 1955年3月 (pp. 1~18)
- 153 山崎義三郎「土地制度改革論と社会主義——フリュールシャイムとカウツキーとの論争」『経済学研究』〔神戸大〕1, 1955年3月 (pp. 185~210)
- 154 静田均「カウツキーの帝国主義概念」『経済論叢』75-5, 1955年5月 (pp. 1~19)
- 155 玉野井芳郎「カール・カウツキー」相原茂編『マルクス経済学説の発展』(経済学説全集8), 河出書房, 1956年11月 (pp. 15~95) →III-209, IV-77

- 156 中村建治「カウツキーの窮乏化論について」『社会主義』71, 1957年7月 (pp. 27~33)
- 157 広田司朗「K.カウツキーの財政思想」(1)~(3)『商学論集』〔関西大〕2-3, 1957年8月 (pp. 17~39). 2-6, 1958年2月 (pp. 1~21). 3-1, 1958年3月 (pp. 24~48)
- 158 中村建治「相対的窮乏化理論と絶対的窮乏化理論」1958年3月〔→I-42〕
- 159 岡茂男「『修正派』論争——工業における資本主義の発達」1958年3月〔→I-42, 43〕
- 160 渡辺寛「カウツキーの『農業問題』について——階級・階層分解論を中心として」『経済志林』〔法政大〕27-2, 1959年4月 (pp. 72~118) / 『レーニンの農業理論』御茶の水書房, 1963年11月 (pp. 3~49) →II-166
- 161 静田均「カウツキーの超帝国主義論」『経済論叢』85-2, 1960年2月 (pp. 1~13)
- 162 松岡保「カール・カウツキーと第1次ロシア革命の農業=土地問題」『人文学報』〔京都大〕12, 1960年3月 (pp. 113~144)
- 163 原田博「ドイツ社会民主党の農業理論——1894-95年の論争を中心にして」『経済論究』〔九州大・大学院〕7, 1960年3月 (pp. 33~51)
- 164 静田均「超帝国主義論の批判と問題点」『経済論叢』85-5, 1960年5月 (pp. 1~23)
- 165 木下悦二「ドイツ社会民主党の関税論争」『経済学雑誌』〔大阪市立大〕45-2, 1961年8月 (pp. 69~94) / 『資本主義と外国貿易』有斐閣, 1963年1月 (pp. 25~51)
- 166 渡辺寛「カウツキーの農民政策論——『農業問題』第2篇の研究」『経済志林』30-1, 1962年1月 (pp. 69~92) / 『レーニンの農業理論』〔→II-160〕 (pp. 50~74)
- 167 宇野弘蔵「修正派ベルンシュタインの主張に対するカウツキーの正統派的反駁について」1962年2月〔→I-47〕
- 168 浅井啓吾「ドイツ社会民主党史研究序説——世紀転換期における正統主義と修正主義をめぐって」(以下)1963年7月, 1964年3月〔→I-50〕
- 169 都留大治郎「農業問題における論争——19世紀末・20世紀初における農業綱領論争」『思想』477, 1964年3月 (pp. 57~68)
- 170 浅井啓吾「ドイツ社会民主党の国家論」『経済系』62, 1964年10月 (pp. 28~35)
- 171 水田洋「ヨーロッパ社会主義思想におけるマルクス主義の位置——ひとつの試論」1964年12月〔→I-52〕
- 172 村瀬興雄「ヨーロッパの社会主義像——カウツキー・パウアー・第2インターナショナル」『思想』489, 1965年3月 (pp. 40~51)
- 173 波多野真「カウツキーの帝国主義論」1966年1月〔→II-95〕
- 174 広田司朗「団結の理想と分裂の現実」『マルクスと社会主義者』1966年1月〔→I-55〕
- 175 水田洋「ベルンシュタインとカウツキー」1966年2月〔I-56〕
- 176 浅井啓吾「第1次ロシア革命とドイツ社会民主党——正統派と修正派のロシア革命論」1966年6月〔→I-58〕
- 177 西川正雄「ドイツ第2帝制における社会民主党——『修正主義論争』の背景」1966年9月〔→I-59〕
- 178 伊達功「『ユートピア』研究におけるカウツキー, チェムパーズ, エイムズ」『松山商大論集』17-5, 1966年10月 (pp. 49~88) / 『近代社会思想の源流——トマス・モア「ユートピア」の分析』ミネルヴァ書房, 1970年5月
- 179 宮川謙三「カウツキーの農民層分解論をめぐる2, 3の論点」『農業経済論集』17, 1966年10月 (pp. 63~71)*
- 180 美馬孝人「ベルンシュタイン論争と窮乏化理論」1966年11月〔→I-60〕
- 181 上林貞治郎「『資本論』と修正主義「理論」」1967年5月〔→I-63〕
- 182 大内力「資本主義と農業」斎藤晴造・菅野俊作編『資本主義の農業問題』日本評論社, 1967年7月 (pp. 1~19) / 「資本主義と農業——カウツキー『農業問題』の検討」『経済学における古典と現代』東京大学出版会, 1972年12月 (pp. 203~224)
- 183 古沢友吉「『資本論』論争の導火線——ベルンシュタイン=カウツキー論争」1967年12月〔→I-65〕
- 184 山本佐門「ドイツ社会民主党リーダーの状況認識と戦術——カール・カウツキーの場合(その1) 1890年~1900年」(以下)『北大法学論集』19-2, 1968年11月 (pp. 210~241). 19-3, 1969年3月 (pp. 152~174) / 『ドイツ社会民主党とカウツキー』北海道大学図書刊行会, 1981年1月 (pp. 33~94) →II-190, 228, 234
- 185 天野光則「レーニン『帝国主義論』の課題と方法——帝国主義の段階規定とカウツキー批判をめぐって」『経済学年誌』〔法政大・大学院〕6, 1969年1月 (pp. 1~21)
- 186 三宅立「ビューロー=カウツキーの情況成立の歴史的諸前提」『駿台史学』〔明治大〕24, 1969年3月 (pp. 133~189)
- 187 阪上孝「ドイツ社会主義の歴史観——カウツキーと帝国主義」河野健二編『講座マルクス主義』7(歴史)日本評論社, 1969年7月 (pp. 27~73)

- 188 穴見博「農業生産協同組合の展望——カウツキー説とダヴィッド説」『農業総合研究』24-1, 1970年2月 (pp. 1~36)*
- 189 鶴田満彦「『帝国主義論』とカウツキーの超帝国主義論」『経済』72, 1970年4月 (pp. 196~208)
- 190 山本佐門「修正主義論争以後のドイツ社会民主党リーダーの政治指導路線——カール・カウツキーを中心として」(1) (2)『北大法学論集』21-3, 1970年12月 (pp. 113~185). 21-4, 1971年3月 (pp. 90~130) / 『ドイツ社会民主党とカウツキー』〔→II-184〕(pp. 95~150)
- 191 穴見博「小農経営と農村家内工業——カウツキー説とダーヴィット説」『農業総合研究』25-1, 1971年2月 (pp. 105~153)*
- 192 伊藤定良「1910年におけるドイツ社会民主党の党内抗争」1971年4月〔→I-66〕
- 193 東中野修「ドイツ社会民主党と修正主義論争——改革と革命の問題」1971年12月〔→I-67〕
- 194 大野節夫「『権力への道』と『消耗戦略』——カウツキー研究序説」『経済学論叢』〔同志社大〕19-5・6, 1972年2月 (pp. 1~38)
- 195 降旗節雄「カウツキーの帝国主義政策論」『帝国主義論の史的展開』現代評論社, 1972年3月 (pp. 90~99) →III-291, IV-176
- 196 原田溥「ドイツ社会民主党とキール農業綱領」『社会科学論集』〔九州大〕12, 1972年3月 (pp. 63~92)
- 197 大野節夫「ドイツ社会民主党の帝国主義論の諸特徴——平和的帝国主義論と帝国主義的経済主義」『経済学』33-3・4, 1972年5月 (pp. 106~118) →IV-180
- 198 大野節夫「カール・カウツキーと急進左派——1912年軍縮論争をめぐる」『経済学論叢』20-3, 1972年6月 (pp. 1~36)
- 199 伊藤誠「カウツキー」鈴木鴻一郎編『マルクス経済学講義』青林書院新社, 1972年9月 (pp. 136~182) →III-295
- 200 安藤実「カウツキー主義批判」島恭彦・宇高基輔・大橋隆憲・宇佐美誠次郎編『新マルクス経済学講座』2 (帝国主義の理論), 有斐閣, 1972年10月 (pp. 289~297)
- 201 降旗節雄「カウツキーの帝国主義政策論」宇野弘蔵監修『講座帝国主義の研究』1 (帝国主義論の形成), 青木書店, 1973年3月 (pp. 38~46) →III-303, IV-190, 191
- 202 湯浅越男「帝国主義と『民族問題』」『民族問題の史的構造——国民的生産力批判序説』現代評論社, 1973年8月 (pp. 163~216) →III-304
- 203 相田慎一「カウツキーと帝国主義認識——植民政策論を中心にして」『経済学雑誌』69-3, 1973年9月 (pp. 73~100)
- 204 横川洋「いわゆる『農業問題』論の視点——カウツキー『農業問題』(1899年)の批判的考察」『茨城大学農学部学術報告』21, 1973年10月 (pp. 75~86)
- 205 降旗節雄「カウツキーの帝国主義政策論」『マルクス経済学の理論構造』筑摩書房(経済学全集4), 1974年6月 (pp. 193~196) →III-310, IV-201
- 206 田中克彦「言語から見た民族と国家——カウツキー再読」『思想』604, 1974年10月 (pp. 24~44) / 「カール・カウツキーと国家語」『言語からみた民族と国家』岩波書店(現代選書13), 1978年8月 (pp. 139~187)
- 207 横川洋「カウツキー農政論序説——研究ノート」『農業経営経済研究ノート たたら農経』2, 1975年*
- 208 市原健志「帝国主義と金融資本に関するノート——帝国主義論史上の先駆的文献について」『商学論叢』〔中央大〕17-2, 1975年7月 (pp. 123~158)
- 209 保住敏彦「第2インターナショナルの植民政策論争とカウツキーの帝国主義認識」『法経論集』経済・経営篇〔愛知大〕78, 1975年8月 (pp. 1~28)
- 210 田中優「『カウツキー主義』に関する一考察」『史学研究』〔広島大〕128, 1975年9月 (pp. 20~40)
- 211 横川洋「カウツキーの農業・農民理論の性格について——『農業問題』(1899年)における社会化論の意義」『茨城大学農学部学術報告』23, 1975年10月 (pp. 131~143)
- 212 松岡利道「帝国主義論の学説史的研究——ドイツ社会民主党を中心に」1975年11月〔→I-75〕
- 213 奥泉清「『超帝国主義』と国家」原田三郎編『資本主義と国家』ミネルヴァ書房, 1975年12月 (pp. 161~178)
- 214 市原健志「SPDの資本主義の発展段階認識と対外政策——19世紀末『修正主義論争』の帝国主義論史上における意義についての一考察」1976年5月〔→I-76〕
- 215 保住敏彦「帝国主義論争におけるカウツキーとヒルファディング」『経済理論学会年報』13 (現代資本主義と恐慌), 青木書店, 1976年7月 (pp. 187~196) →IV-223

- 216 柳原太郎「クノーとカウツキーの国家論争——国家と社会の問題に関連して」『紀要』〔奈良文化女子短大〕7, 1976年11月 (pp. 25~40)*
- 217 市原健志「カウツキーとヒルファディング帝国主義論の相違について——1900年代初頭の関税政策論を中心に」『商学論纂』18-4, 1976年11月 (pp. 47~85) →IV-229
- 218 保住敏彦「帝国主義論史におけるカウツキー——1901~1909年期の理論の特徴と限界」『愛知大学30周年記念論文集』(経済編), 1976年11月 (pp. 61~90)
- 219 山本秀行「アントン・パネクークとカール・カウツキー」『思想』633, 1977年3月 (pp. 103~124)
- 220 保住敏彦「帝国主義論争におけるカウツキー」『帝国主義研究』II, 1977年3月〔→I-78〕(pp. 319~348)
- 221 相田慎一「帝国主義発達小史——帝国主義認識の発酵期を中心に」『講座経済学史』4, 1977年4月〔→I-80〕(pp. 21~44)
- 222 横川洋「カウツキー『農業問題』における理論と政策」『茨城大学農学部学術報告』25, 1977年10月 (pp. 115~183)
- 223 大和田寛「カウツキーの小農把握について」『東北大学農学研究報告』29-1・2, 1978年3月 (pp. 77~90)
- 224 伊藤定良「第2インタナショナルと国家問題——第1次世界大戦前におけるカール・カウツキーとドイツ社会民主党を中心に」天野和夫・片岡昇・長谷川正安・藤田勇・渡辺洋三編『マルクス主義法学講座』2, 日本評論社, 1978年6月 (pp. 107~126)
- 225 久間清俊「K.カウツキーの帝国主義認識——再生産と世界市場論」『鹿児島経大論集』19-3, 1978年12月 (pp. 1~25)
- 226 市原健志「ドイツ社会民主党(SPD)内の政治的大衆ストライキ論争(1)——修正主義論争までの時期を中心に」『商学論纂』20-5, 1979年1月 (pp. 31~80)
- 227 市原健志「ドイツ社会民主党(SPD)内の政治的大衆ストライキ論争(2)——修正主義論争からロシア革命(1905年)までの時期を中心に」『商学論纂』20-6, 1979年3月 (pp. 33~86)
- 228 山本佐門「2つの大戦の間のカール・カウツキー——そのポリシェビズム・ファシズム観を中心に」『北大法学論集』29-3・4, 1979年3月 (pp. 331~358) / 「ドイツ社会民主党とカウツキー」〔→II-184〕(pp. 278~305)
- 229 田中良明「カウツキーの通商政策論」『経済学雑誌』80-2, 1979年7月 (pp. 36~52)
- 230 石川勝彦「固定資本と周期的恐慌——カウツキー盾環論によせて」『大樟論叢』〔大阪経大・大学院〕41, 1979年12月 (pp. 67~81)
- 231 相田慎一「帝国主義の成立とマルクス経済学」佐藤金三郎編『基礎経済学大系』2 (マルクス経済学), 青林書院新社, 1980年7月 (pp. 303~331)
- 232 石川勝彦「カウツキー窮乏化論によせて——小泉氏所説を中心として」『大阪経大論集』137, 1980年9月 (pp. 27~44)
- 233 相田慎一「カウツキー『帝国主義論』研究動向」『経済学史学会年報』18, 1980年11月 (pp. 1~6) →IV-290
- 234 山本佐門「ドイツ社会民主党とカウツキー」北海道大学図書刊行会, 1981年1月 (viii, 360, 27p.) →II-184, 190, 228
- 235 久間清俊「K.カウツキーの超帝国主義論——民主主義, 社会主義論を中心として」上, 『鹿児島経大論集』22-1, 1981年4月 (pp. 23~40)
- 236 福岡利裕「ドイツ社会民主党における修正主義論争」1981年11月〔→I-85〕

III ルクセンブルク邦語文献目録

A ルクセンブルク邦訳著作目録

※配列および原タイトルの表記は, J. P. Netti, *Rosa Luxemburg* の巻末目録を参考にし, 原タイトル末尾にその通しナンバーを付けた。

a 手紙

Briefe aus dem Gefängnis, Berlin 1920. [1]

- 1 山川菊栄抄訳「ローザの獄中よりの書翰」『リープクネヒトとルクセンブルグ』インタナショナル社(水曜会パンフレット6), 1921年10月 (pp. 24~28)
- 2 井口孝親訳「ローザ・ルクセンブルグの手紙及びその生涯」同人社, 1925年7月 (5, 6, 3, 4, 215p.)
- 3 山川菊栄抄訳「ローザの獄中よりの書翰」『リープクネヒトとルクセンブルグ』上西書店, 1925年12月 (pp. 65~69)
- 4 堺真柄編『ロザの手紙——ロザ・ルクセンブルグの獄中消息』無産社(無産社パンフレット8), 1926年1月 (32p.)
- 5 秋元寿恵夫訳『獄中からの手紙』世界文学社, 1952年5月 (165p.)
- 6 北郷隆五訳「ローザ・ルクセンブルグの手紙——ゾフィー・リープクネヒトへ」青木文庫, 1952年11月 (122p.)
- 7 孝橋正一訳「ローザの手紙」婦人民主クラブ, 1964年8月 (113p.)
- 8 孝橋正一訳「獄中よりゾフィー・リープクネヒトあて」『ローザ・ルクセンブルグ 思想・行動・手紙』勁草書房, 1969年11月 (pp. 165~237) →III-13
- 9 秋元寿恵夫訳『獄中からの手紙』岩波文庫, 1982年5月 (138p.)

Briefe an Karl und Luise Kautsky (1896-1918), Berlin 1923. Louis P. Lochner (tr.), *Letters to Karl and Louis Kautsky*, New York 1923. [3]

- 10 松井圭子訳「ローザ・ルクセンブルグの手紙——カールおよびルイーゼ・カウツキー宛」岩波文庫, 1932年5月*
- 11 浅野正一訳「カウツキー夫妻への手紙」改造文庫1-56, 1934年*
- 12 川口浩・松井圭子訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙——カールおよびルイーゼ・カウツキー宛 (1896-1918)』岩波文庫, 1963年10月 (341p.)
- 13 孝橋正一抄訳「カールとルイーゼ・カウツキーあて」『ローザ・ルクセンブルグ 思想・行動・手紙』〔→III-8〕(pp. 238~315)

Rosa Luxemburg, *Briefe an Freunde*, Hamburg 1950. (Nach dem von Luise Kautsky fertig gestellten Manuskript, herausgegeben von Benedikt Kautsky.) [28]

- 14 伊藤成彦訳編「友人への手紙」中野好夫・吉川幸次郎・桑原武夫編『世界ノンフィクション全集』21, 筑摩書房, 1961年10月 (pp. 213~358)
- 15 川口浩・松井圭子抄訳「付録 [友人への手紙]」『ローザ・ルクセンブルグの手紙』〔→III-12〕(pp. 247~305)

Róża Luksemburg, *Listy do Leona Jogiches-Tyszki*, Tomy 1~3, Warszawa 1968~71.

- 16 伊藤成彦・米川和夫・阪東宏訳「ローザ・ルクセンブルグ, ヨギヘスへの手紙」全4巻, 河出書房新社, (1)1976年5月 (327, vi p.) (2)1976年7月 (329, vi p.) (3)1977年1月 (366, x p.) (4)1977年6月 (334, xv, 17p.)

Rosa Luxemburg im Gefängnis. Hrsg. von Charlotte Beradt, Frankfurt am Main 1973.

- 17 渡辺文太郎訳『獄中のローザ——マティールデ・ヤーコブへの手紙』新泉社, 1977年6月 (258p.)

b 演説

Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands. Abgehalten zu Stuttgart vom 3 bis 8 Oktober 1898, Berlin 1898, S. 99-100, 117-8 [40]

- 18 野村修訳「ドイツ社会民主党(SPD)シュトゥットガルト大会での演説——戦術問題にかんする討議のなかで」『ローザ・ルクセンブルグ選集』1, 現代思潮社, 1962年 月 (pp. 25~30)

Protokoll……1899, S. 171-5, 219, 222, 265-7, 290-1. [45]

- 19 田窪清秀訳「ドイツ社会民主党ハノーヴァー大会での演説」『選集』1 (pp. 74~86)

Cinquième Congrès Socialiste Internationale tenu à Paris du 23 au 27 Septembre 1900. Compte rendu analytique officiel, Paris 1901. Soc. Nouvelle de Librairie et d'Édition, pp. 31-2, 94, 105; unofficial, pp. 43-6, 181-5, 187. [50]

- 20 山本統敏他抄訳「ローザ・ルクセンブルクの演説」『第2インターの革命論争』（マルクス主義革命論史2），紀伊国屋書店，1975年5月（pp. 422~423）→III-29, 52, 56, 59, 61, 75, 78, 84, 85, 132
- Protokoll*……1905, S. 256-7, 269-71, 320-1. [70]
- 21 高原宏平訳「ドイツ社会民主党イエーナ大会での演説」『選集』2（pp. 25~36）
- Protokoll*……1906, S. 260-2, 315-6. [73]
- 22 高原宏平訳「ドイツ社会民主党マンハイム大会での演説」『選集』2（pp. 46~51）
- Protokoly Londonskii s'ezd*, 1907, pp. 83-9, 284-91, 321-4. [78]
- 23 田窪清秀訳「ロシア社会民主労働党ロンドン党大会における演説」『選集』2（pp. 62~94）
- Septième Congrès Socialiste Internationale tenu à Stuttgart du 16 au 27 Août 1907. Compte rendu analytique*, Brussels 1908, pp. 91-2, 152-5. [80]
- 24 野村修訳「社会主義インターナショナル・シュトゥットガルト大会での演説」『選集』2（pp. 95~97）
- Protokoll*……1908, S. 230-1, 267-9, 363-5. [83]
- 25 野村修訳「SPDニュールンベルク大会での演説」『選集』2（pp. 98~109）
- Protokoll*……1910, 181-2, 304-7, 426-30. [89]
- 26 田窪清秀訳「SPDマクデブルク大会での演説」『選集』2（pp. 128~140）
- Protokoll*……1911, S. 204-7, 247-9, 348-9. [92]
- 27 高原宏平訳「ドイツ社会民主党イエーナ大会での演説」『選集』3（pp. 7~19）
- ‘Der politische Massenstreik’, *Vorwärts*, 24 Juli 1913, Nr. 187, Beilage 1. S. 1; *Leipziger Volkszeitung*, 26 Juli 1913, Nr. 171, Beilage 3, S. 1. [100]
- 28 野村修訳「政治的大衆ストライキ」『選集』3（pp. 58~65）
- Protokoll*……1913, S. 194-5, 197-8, 288-93, 485-7. [104]
- 29 山本統敏他抄訳「ローザ・ルクセンブルクの提案」『第2インターの革命論争』〔→III-20〕（pp. 404~405）
- ‘Volksurteil über Richterurteil’, *Vorwärts*, 23 Februar 1914, Nr. 53, S. 1. [110]
- 30 田窪清秀訳「判決にたいする回答」『選集』3（pp. 123~125）
- Gründungsparteitag der kommunistischen Partei Deutschlands (Spartakusbund) vom 30 Dezember 1918 bis 1 Januar 1919, Bericht*……, Berlin [n. d.] [115]
- 31 松山止戈訳「綱領に関する演説」『ローザ政治論集——彼女の過失とその訂正』叢文閣，1927年12月（pp. 215~254）→III-144, 156
- 32 清水平九郎訳「スパルタカス綱領に関する演説」『マッセンストライク』政治批判社（政治批判叢書12），1928年2月（pp. 121~159）／『マッセンストライク』弘文堂，1928年*→III-103, 114, 117, 120, 126, 134
- 33 野村修訳「綱領について」『選集』4（pp. 127~160）
- ‘Der politische Massenstreik und die Gewerkschaften’, *Propagandist*, 1930, Nr. 10-1. [116]
- 34 野村修訳「政治的大衆ストライキと労働組合」『選集』2（pp. 141~158）

c 論文

Anon., Angielski strajk górniczy (The English miners' strike), *Sprawa Robotnicza*, Nov.-Dec. 1893, Nos. 5/6, pp. 11~2. [125]

- 35 野村修訳「1893年のイギリス鉱山労働者のストライキ」【選集】1 (pp. 1~10)

R. K., Jak powstało Święto Majowe (How the May festival was created), *Sprawa Robotnicza*, Feb. 1894, No. 8, pp. 2-3. [128]

- 36 野村修訳「メーデーはどのようにして生まれたか?」【選集】1 (pp. 11~13)

Anon., Ruch robotniczy za granicą : Pierwszy kongres niemieckich górników (The workers' movement abroad : the first congress of the German miners), *Sprawa Robotnicza*, Jan. 1895, No. 19, pp. 2-3. [145]

- 37 野村修訳「第1回ドイツ鉱山労働者大会」【選集】1 (pp. 14~19)

'Neue Strömungen in der polnischen sozialistischen Bewegung in Deutschland und Österreich, *NZ*, 1896, Bd. II. S. 176-81, 206-16. [149]

- 38 丸山敬一訳「ドイツおよびオーストラリアにおけるポーランド社会主義運動の新しい潮流」【マルクス主義と民族主義】福村出版, 1974年12月 (pp. 74~108) →III-38, 39, 40, 41, 42, 48, 81

'Der Sozialpatriotismus in Polen', *NZ*, 1896, Bd. II., S. 459-70. [153]

- 39 丸山敬一訳「ポーランドにおける社会愛国主義」【マルクス主義と民族主義】〔→III-37〕 (pp. 109~130)

R. L. : 'Die nationalen Kämpfe in der Türkei und die Sozialdemokratie : (1) Die türkischen Zustände, (2) Die Zersetzung, (3) Die Stellungnahme der Sozialdemokratie', *Sächsische Arbeiter Zeitung*, 8-10 Dez. 1896, Nr. 234-6. [156]

- 40 丸山敬一訳「トルコにおける民族闘争と社会民主党」【マルクス主義と民族主義】〔→III-37〕 (pp. 182~197)

'Zur Orientpolitik des "Vorwärts"', *Sächsische Arbeiter Zeitung*, 25 Nov. 1896, Nr. 273. [157]

- 41 丸山敬一訳「『フォアヴェルツ』の東方政策によせて」【マルクス主義と民族主義】〔→III-37〕 (pp. 198~203)

'Der Sozialismus in Polen', *Sozialistische Monatshefte*, Dez. 1897, Nr. 10, S. 547-56. [159]

- 42 丸山敬一訳「ポーランドにおける社会主義」【マルクス主義と民族主義】〔→III-37〕 (pp. 131~147)

'Von Stufe zu Stufe. Zur Geschichte der bürgerlichen Klassen in Polen', *NZ*, 1897, I. Bd., S. 164-76. [160]

- 43 丸山敬一訳「一段, また一段——ポーランド・ブルジョア階級の歴史」【マルクス主義と民族主義】〔→III-37〕 (pp. 148~172)

'Sozialreform oder Revolution', *Leipziger Volkszeitung*, 21-28 Sep. 1898, Nr. 219-25. r. I. : 'Sozialreform oder Revolution', *Leipziger Volkszeitung*, 4-8 Apr. 1899, Nr. 76-80. [190, 231]

- 44 緒方潔・沼田光一郎訳【改良主義論】希望閣, 1926年7月(3, 6, 2, 192p.)
45 松井隆一抄訳「資本主義の適応」【マルクス恐慌理論】〔→II-50〕 (pp. 155~172)
46 松崎敏太郎抄訳「資本主義の適応」【恐慌論】〔→II-51〕 (pp. 155~172)
47 喜安朗訳「社会改良か革命か」【選集】1 (pp. 154~246)

r. I., 'Possibilismus, Opportunismus', *Sächsische Arbeiterzeitung*, 30 Sep. 1898, Nr. 227, S. 1. [191]

- 48 野村修訳「ポシビリズムとオポチュニズム」【選集】1 (pp. 20~24)

'Adam Mickiewicz', *Leipziger Volkszeitung*, 24 Dez. 1898, Nr. 298, Beilage 3, S. 1. [217]

- 49 丸山敬一訳「アダム・ミツケヴィッチ」【マルクス主義と民族主義】〔→III-37〕 (pp. 173~180)

- rl. : 'Miliz und Militarismus', *Leipziger Volkszeitung*, 20-22 Feb. 1899, Nr. 42, S. 1-2, Nr. 43, S. 1-2, Nr. 44, S. 1-2. [227]
- 50 野村修訳「ミリートとミリタリズム」【選集】1 (pp. 31~55)
- rl. : 'Eine taktische Frage', *Leipziger Volkszeitung*, 6 Juli 1899, Nr. 153. [234]
- 51 野村修訳「ひとつの戦術問題」【選集】1 (pp. 56~60)
- r.l. : 'Hohle Nüsse', *Leipziger Volkszeitung*, 22 Juli 1899, Nr. 167. [235]
- 52 田窪清秀訳「実のないくみ」【選集】1 (pp. 61~67)
- rl. : 'Zum kommenden Parteitag', *Leipziger Volkszeitung*, 14-16 Sep. 1899, Nr. 213, S. 1-2, Nr. 214, S. 1-2, Nr. 215, S. 1-2. [238]
- 53 山本統敏他抄訳「きたるべき党大会によせて」【第2インターの革命論争】〔→III-20〕(pp. 81~93)
- rl. : 'Unser leitendes Parteiorgan', *Leipziger Volkszeitung*, 22 Sep. 1899, Nr. 220. [240]
- 54 田窪清秀訳「党の指導機関」【選集】1 (pp. 68~73)
- rl. : 'Um die Beute', *Leipziger Volkszeitung*, 29 März 1900, Nr. 73, S. 1. [256]
- 55 田窪清秀訳「獲物をめぐって」【選集】1 (pp. 87~91)
- 'Zurück auf Adam Smith', *NZ*, 1900, 2. Bd., S. 180-6. [260]
- 56 久留間敏造訳「古典派, 俗流, 歴史派及マルクス派経済学」【大原社会問題研究所雑誌】1-1, 1923年8月 (pp. 206~222)
- 'Die sozialistische Krise in Frankreich', *NZ*, 1901, 1. Bd., S. 495-9, 516-25, 548-58, 619-31, 676-88. [269]
- 57 山本統敏他抄訳「フランスにおける社会主義の危機」【第2インターの革命論争】〔→III-20〕(pp. 96~99)
- 'Die badische Budgetabstimmung', *NZ*, 1901, 1. Bd., S. 14-20. [271]
- 58 大内兵衛訳「予算の協賛についての社会党の原理とタクティック」【大原社会問題研究所雑誌】8-1, 1931年6月 (pp. 104~120) / 【大内兵衛著作集】9, 岩波書店, 1975年8月 (pp. 242~248)
- 'Der Parteitag und der hamburger Gewerkschaftsstreit', *NZ*, 1901, 1. Bd., S. 705-11. [275]
- 59 高原宏平訳「党大会とハンブルクの労働組合の紛争」【選集】1 (pp. 92~104)
- Anon. : 'Der dritte Akt', *Leipziger Volkszeitung*, 14-15 Apr. 1902, Nr. 84, S. 1-2, Nr. 85, S. 1-2. [284]
- 60 山本統敏他訳「第三幕 [ベルギーの闘争]」【第2インターの革命論争】〔→III-20〕(pp. 150~156)
- 'Und zum dritten Male das belgische Experiment', *N S. 1-2*. [284]
- 60 山本統敏他訳「第三幕 [ベルギーの闘争]」【第2インターの革命論争】〔→III-20〕(pp. 150~156)
- 'Und zum dritten Male das belgische Experiment', *NZ*, 1902, 2. Bd., S. 203-10, 274-80. [292]
- 61 野村修抄訳「暴力論」【情況】4, 1968年11月 (pp. 102~107) / 「暴力と合法性」【暴力と反権力の論理】せりか書房, 1969年7月 (pp. 56~66)
- 62 山本統敏他訳「三度ベルギーの実験を論ず」【第2インターの革命論争】〔→III-20〕(pp. 137~150)
- Anon. : 'Vor Ludwigshafen', *Leipziger Volkszeitung*, 19 Juni 1902, Nr. 138. [299]
- 63 高原宏平訳「ルートヴィヒスハーフェン大会をまえに」【選集】1 (pp. 105~109)

- Anon. : 'Der Achtstundentag auf dem Parteitag', *Leipziger Volkszeitung*, 19. Sep. 1902, Nr. 217, S. 1. [303]
- 64 高原宏平訳「党大会で討議された八時間労働問題」【選集】1 (pp. 110~114)
- 'Stillstand und Fortschritt im Marxismus', *Vorwärts*, 14 März 1903, Nr. 62, S. 2-3. [308]
- 65 マルクス書房編輯部訳「マルクス主義は歴史過程の一部分である」「マルクス主義とプロレタリアートの事業」【マルクス学教科書】9, 1929年10月 (pp. 19~23, 45~48)
- 'Im Rate der Gelehrten', *NZ*, 1903, 1. Bd., S. 5-10. [318]
- 66 高原宏平訳「学者の評議会」【選集】1 (pp. 115~124)
- 'Geknickte Hoffnungen', *NZ*, 1903, 1. Bd., S. 33-9. [322]
- 67 高原宏平訳「裏切られた期待」【選集】1 (pp. 125~135)
- Anon. : 'Wojna rosyisko-japońska' (War between Japan and Russia), *Czerwony Sztandar*, Feb. 1914, No. 14, pp. 1-2. [333]
- 68 高原宏平訳「戦争」【選集】1 (pp. 136~141)
- 'Organisationsfragen der russischen Sozialdemokraten', *NZ*, 1904, 2. Bd., S. 484-92, 529-35. *Iskra*, 10 July 1904, No. 69, pp. 2-7. [357]
- 69 片岡啓治訳「ロシア社会民主党の組織問題」【選集】1 (pp. 247~271)
- rl. : 'Sozialdemokratie und Parlamentarismus', *Sächsische Arbeiterzeitung*, 5, 7 Dez. 1904, Nr. 282, S. 1, Nr. 284, S. 1-2. [360]
- 70 高原宏平訳「社会民主主義と議会主義」【選集】1 (pp. 142~153)
- 'Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx. Theorien über den Mehrwert. ……', *Vorwärts*, 8 Jan. 1905, Nr. 7, Beilage 3, S. 1-2. [366]
- 71 寺尾浄人訳「経済学史とマルクスの立場」【社会科学】5 - 2, 1929年9月 (pp. 212~227)
- 'Nach dem ersten Akt', *NZ*, 1905, 1. Bd., S. 610-4. [368]
- 72 高原宏平訳「第一幕のあと」【選集】2 (pp. 5~12)
- 'Die Revolution in Russland', *Gleichheit*, 8 Feb. 1905, Nr. 3, S. 13. [369]
- 73 高原宏平訳「ロシアでの革命」【選集】2 (pp. 1~4)
- 'Das Problem der "hundert Völker"', *NZ*, 1905, 1. Bd., S. 643-6. [370]
- 74 高原宏平訳「【弱小民族】の問題」【選集】2 (pp. 13~19)
- 'Co dalej?' (What next?), *Czerwony Sztandar*, April 1905, No. 25, pp. 1-4. [378] →III-132
- rl. : 'Im Feuerscheine der Revolution', *Sächsische Arbeiterzeitung*, 29 Apr. 1905, Nr. 98, S. 2-3. [380]
- 75 高原宏平訳「革命の火照り」【選集】2 (pp. 20~24)
- rl. : 'Die Debatten in Köln', *Sächsische Arbeiterzeitung*, 30-31 Mai 1905, Nr. 123-4. [393]
- 76 山本統敏他訳「ケルンの論争」【第2インターの革命論争】[→III-20] (pp. 347~350)
- Anon. : 'Eine masslose Provokation', *Vorwärts*, 19 Nov. 1905, Nr. 272, S. 1. [425]
- 77 高原宏平訳「極端な挑発」【選集】2 (pp. 37~41)

- 'Die Lösung der Frage', *Gleichheit*, 29 Nov. 1905, Nr. 24, S. 139. [429]
- 78 高原宏平訳「問題の解決」『選集』2 (pp. 42~45)
- Anon. : 'Blankizm i socjaldemokracja' (Blanquism and Social Democracy), *Czerwony Sztandar*, 27 June 1906, No.82, pp.1-2. [441]
- 79 山本統敏他訳「ブランキズムと社会民主主義」『第2 インターの革命論争』〔→III-20〕(pp. 242~246)
- 'Die zwei Methoden der Gewerkschaftspolitik', *NZ*, 1906, 1. Bd., S. 134-7. [446]
- 80 高原宏平訳「労働組合政策の二つの方式」『選集』2 (pp. 52~57)
- 'Die Maifeier', *Gleichheit*, 1 Mai 1907, Nr. 9, S. 71. [450]
- 81 田窪清秀訳「メーデー」『選集』2 (pp. 58~61)
- 'Kwestia narodowościowa i autonomia' (The national question and [the problem of] autonomy, *Przeglad Socjaldemokratyczny*, Aug.-Dec. 1908, No.6, pp. 482-515, No.7, pp. 597-631, Nos. 8/9, pp. 687-710, No.10, pp. 795-818; June-Sep. 1909, No.12, pp. 136-63, Nos. 14/15, pp. 351-76. [463]
- 82 丸山敬一抄訳「民族問題と自治」『マルクス主義と民族問題』〔→III-37〕(pp. 8~71)
- 'Was weiter?', *Dortmunder Arbeiterzeitung*, 14-15 März 1910. [478]
- 83 野村修訳「つぎはなにを」『選集』2 (pp. 110~122)
- 'Zeit der Aussaat', *Volksmacht*, Breslau, 15 März 1910, Nr. 71, S. 1. [479]
- 84 野村修訳「種まきの時期」『選集』2 (pp. 123~127)
- 'Ermattung oder Kampf?', *NZ*, 1910, 2. Bd., S. 257-66, 291-305 : *Leipziger Volkszeitung*, 28 Mai-7 Juni 1910, Nr. 120, 121, 126-8. [481]
- 85 山本統敏他訳「消耗か闘争か」『第2 インターの革命論争』〔→III-20〕(pp. 381~402)
- 'Friedensutopien', *Leipziger Volkszeitung*, 6-8 Mai 1911, Nr. 103, S. 1-2, N. 104. [498]
- 86 山本統敏他訳「平和のユートピア」『第2 インターの革命論争』〔→III-20〕(pp. 470~479)
- R. L. : 'Um Marokko', *Leipziger Volkszeitung*, 24 Juli 1911, Nr. 168, S. 1-2. [511]
- 87 野村修訳「モロッコをめぐる」『選集』2 (pp. 159~165)
- 'Unser Marokko-Flugblatt', *Leipziger Volkszeitung*, 26 Aug. 1911, Nr. 196. [516]
- 88 野村修訳「モロッコ問題のパンフレット」『選集』2 (pp. 166~171)
- 'Im Asyl', *Gleichheit*, 8 Jan. 1912, Nr. 8, S. 113-5. [521]
- 89 高原宏平訳「貧民収容施設で」『選集』3 (pp. 34~42)
- 'Frauenwahlrecht und Klassenkampf', *Frauenwahlrecht*, 8 März 1912. [525]
- 90 高原宏平訳「婦人選挙権と階級闘争」『選集』3 (pp. 50~57)
- 'Marzensstürme', *Gleichheit*, 18 März 1912, Nr. 13, S. 1-2. [527]
- 91 高原宏平訳「三月のあらし」『選集』3 (pp. 43~49)
- 'Das Offiziösentum der Theorie', *NZ*, 1913, 2. Bd., S. 828-43. [550]
- 92 野村修訳「理論の御用化」『選集』3 (pp. 66~92)

- R. L. : 'Bilanz von Zabern', *Sozialdemokratische Korrespondenz*, 6 Jan. 1914, Nr. 3. [556]
- 93 野村修訳「ツァーベルン事件の決算」【選集】3 (pp. 93~97)
- R. L. : 'Die künftige Revanche', *Sozialdemokratische Korrespondenz*, 20 Jan. 1914, Nr. 9, S. 1-3. [558]
- 94 野村修訳「きたるべき報復」【選集】3 (pp. 98~102)
- R. L. : 'Der gelbe Sklaventanz', *Sozialdemokratische Korrespondenz*, 10 Feb. 1914, Nr. 17. [561]
- 94 野村修訳「御用組合の奴隷まつり」【選集】3 (pp. 103~107)
- R. L. : 'Die andere Seite der Medaille', *Sozialdemokratische Korrespondenz*, 2 Apr. 1914, Nr. 39. [564]
- 95 田窪清秀訳「メダルの裏面」【選集】3 (pp. 126~130)
- Anon. : 'Parteidisziplin', *Sozialdemokratische Korrespondenz*, 4 Dez. 1914, Nr. 125. [587]
- 96 田窪清秀訳「インターナショナルの再建」【選集】3 (pp. 135~149)
- 'Der Wiederaufbau der Internationale', *Internationale*, 15 Apr. 1915, Nr. 1, S. 1-10. [589]
- 97 田窪清秀訳「インターナショナルの再建」【選集】3 (pp. 135~149)
- 98 現代政治思想史研究グループ訳「インターナショナルの再建」【インターナツィオナーレ——マルクス主義の実践と理論のための月刊誌】出版会四季, 1966年〔月記載なし〕(pp. 2~14) →III-99, 253
- Mortimer : 'Perspektiven und Projekte', *Internationale*, 15 Apr. 1915, Nr. 1, S. 71-7. [590]
- 99 現代政治思想史研究グループ訳「展望と構想」【インターナツィオナーレ】〔→III-98〕(pp. 94~103)
- Anon. 'Der Rhodus', *Spartakusbrief*, 20 Sep. 1916, Nr. 1, S. 2-4. [593]
- 100 高原宏平訳「ロードス島」【選集】4 (pp. 45~52)
- Anon. : 'Liebknecht', *Spartakusbrief*, 20 Sep. 1916, Nr. 1, S. 2-4. [594]
- 101 田窪清秀訳「リーブクネヒト」【選集】4 (pp. 30~35)
- Anon. : 'Zwei Osterbotschaften', *Spartakusbrief*, Mai 1917, Nr. 5, S. 7-8. [613]
- 102 高原宏平訳「二つの復活祭教書」【選集】4 (pp. 53~58)
- 'Der Anfang', *Rote Fahne*, 18 Nov. 1918, Nr. 3, S. 1-2. [625]
- 103 清水平九郎抄訳「1918年11月以後(ローテ・ファナーネに掲載された諸論文の抜萃)」【マッセンストライク】〔→III-32〕(pp. 161~182) →III-117, 120, 126
- 104 高原宏平訳「革命のはじまり」【選集】4 (pp. 59~63)
- R. L. : 'Das alte Spiel', *Rote Fahne*, 18 Nov. 1918, Nr. 3, S. 2. [626]
- 105 高原宏平訳「陳腐な手」【選集】4 (pp. 64~68)
- 'Die Nationalversammlung', *Rote Fahne*, 20 Nov. 1918, Nr. 5, S. 1-2. [628]
- 106 高原宏平訳「国民議会」【選集】4 (pp. 69~73)
- 'Ein gewagtes Spiel', *Rote Fahne*, 24 Nov. 1918, Nr. 9, S. 1-2. [629]
- 107 高原宏平訳「無謀なくわだて」【選集】4 (pp. 74~78)
- R. Luxemburg, K. Liebknecht, F. Mehring, K. Zetkin : 'An die Proletarier aller Länder!', *Rote Fahne*, 25 Nov. 1918, Nr. 10, S. 1. [630]
- 108 高原宏平訳「万国のプロレタリアに」【選集】4 (pp. 79~85)

- Anon. : 'Der Anheron in Bewegung', *Rote Fahne*, 27 Nov. 1918, Nr. 12, S. 1-2. [631]
- 109 高原宏平訳「動き出したアケロン」【選集】4 (pp. 86~90)
- Juvenis : 'Der Weg zum nichts', *Rote Fahne*, 28 Nov. 1918, Nr. 13, S. 2. [632]
- 110 高原宏平訳「破滅への道」【選集】4 (pp. 91~93)
- Anon. : 'Die "unreife" Masse', *Rote Fahne*, 3 Dez. 1918, Nr. 26, S. 1-2. [634]
- 111 高原宏平訳「【未熟】な大衆」【選集】4 (pp. 94~99)
- Anon. : 'Um den Vollzugsrat', *Rote Fahne*, 11 Dez. 1918, Nr. 26, S. 1-2. [636]
- 112 高原宏平訳「執行評議会をめぐって」【選集】4 (pp. 100~105)
- Anon. : 'Was will der Spartakusbund?', *Rote Fahne*, 14 Dez. 1918, Nr. 29. [637]
- 113 〔無署名〕「社会主義と議会主義」【社会思想】3-6, 1924年8月 (pp. 36~45)
- 114 清水平九郎訳「スバルタカス綱領」【マッセンストライク】〔→III-32〕 (pp. 107~120)
- 115 富永幸生訳「スバルタカス綱領」【現代史研究】24, 1970年6月 (pp. 53~61)
- Anon. : 'Auf die Schanzen', *Rote Fahne*, 15 Dez. 1918, Nr. 30, S. 1. [638]
- 116 高原宏平訳「保塁のうえへ」【選集】4 (pp. 106~111)
- Anon. : 'Nationalversammlung oder Räteregierung', *Rote Fahne*, 17 Dez. 1918, Nr. 32, S. 1-2. [639]
- 117 清水平九郎抄訳「1918年11月以後」〔→III-103〕 (pp. 161~182)
- 118 高原宏平訳「国民議会か評議会政府か」【選集】4 (pp. 112~116)
- Anon. : 'Eberts Mamelucken', *Rote Fahne*, 20 Dez. 1918, Nr. 35, S. 1. [640]
- 119 高原宏平訳「エーベルトの私兵」【選集】4 (pp. 117~122)
- Anon. : 'Die Wahlen zur Nationalversammlung', *Rote Fahne*, 23 Dez. 1918, Nr. 38, S. 1-2. [643]
- 120 清水平九郎抄訳「1918年11月以後」〔→III-103〕 (pp. 161~182)
- 121 高原宏平訳「国民議会のための選挙」【選集】4 (pp. 123~126)
- Anon. : 'Was machen die Führer?', *Rote Fahne*, 7 Jan. Nr. 7, S. 1. [645]
- 122 野村修訳「指導部は何をしているか」【選集】4 (pp. 161~164)
- Anon. : 'Versäumte Pflichten', *Rote Fahne*, 8 Jan. 1919, Nr. 8, S. 1. [646]
- 123 野村修訳「忘れられた任務」【選集】4 (pp. 165~169)
- Anon. : 'Das Versagen der Führer', *Rote Fahne*, 11 Jan. 1919, Nr. 14, S. 1-2. [647]
- 124 野村修訳「指導部の無能ぶり」【選集】4 (pp. 170~174)
- Anon. : 'Kartenhäuser', *Rote Fahne*, 13 Jan. 1919, Nr. 13, S. 1-2. [648]
- 125 野村修訳「空中楼阁」【選集】4 (pp. 175~180)
- 'Die Ordnung herrscht in Berlin', *Rote Fahne*, 14 Jan. 1919, Nr. 14, S. 1-2. [649]
- 126 清水平九郎抄訳「1918年11月以後」〔→III-103〕 (pp. 161~182)
- 127 野村修訳「ベルリンの秩序は維持されている」【選集】4 (pp. 181~188)

'Nach dem Jenaer Parteitag', *Internationale*, 1 März 1927, S. 147-53. [651]

- 128 高原宏平訳「イエーナでの党大会を終えて」【選集】3 (pp. 20~33)

'Польский и Русский Социализм в их взаимном отношении'

- 129 佐保雅子訳「ポーランドとロシアの社会主義の相互関係」(1)(2)【中京法学】12-2, 1977年9月 (pp. 33~69). 13-1, 1978年6月 (pp. 75~108)

d パンフレットおよび著書

Die industrielle Entwicklung Polens. Inaugural Dissertation zur Erlangung der staatswissenschaftlichen Doktorwürde der hohen staatswissenschaftlichen Fakultät der Universität Zürich, Leipzig 1898. [661]

- 130 肥前栄一訳「ポーランドの産業的発展」未来社, 1970年10月 (238, 8 p.)

Sozialreform oder Revolution. Mit einem Anhang : Miliz und Militarismus, Leipzig 1899. *Sozialreform oder Revolution? Zweite durchgehene und ergänzte Auflage*, Leipzig 1908. [662, 686] →III-44, 45, 46, 47

Kwestia Polska a nich socjalistyczny (The Polish question and the Socialist movement), Craców 1905. Vorwort zu dem Sammelband *Die Polnische Frage und die Sozialistische Bewegung*, Hrsg. u. eingel v. Jürgen Hentze, 1971, S. 179-219. [670]

- 131 丸山敏一訳「『ポーランド問題と社会主義運動』序文」【中京法学】13-2, 1978年8月 (pp. 67~110)

Anon.: *Z doby rewolucyjnej. Co dalej?* (From the days of revolution. What next?), Craców 1905. *Warszaw* 1906. [675, 685]

- 132 山本統敏他訳「革命期において——さらに何を」(I)~(II)【第2インターの革命論争】〔→III-20〕(pp. 201~241)

Massenstreik, Partei und Gewerkschaften, Hamburg 1906. [681]

- 133 松本悟朗訳「大衆罷業, 党及び組合」白揚社, 1927年11月 (2, 1, 145p.)

- 134 清水平九郎訳「マッセンストライク (大衆罷業, 政党及び組合)」【マッセンストライク】〔→III-32〕(pp. 1~106)

- 135 河野信子・谷川雁訳「大衆ストライキ・党および労働組合」【選集】2 (pp. 172~265)

Die Akkumulation des Kapitals. Ein Beitrag zur ökonomischen Erklärung des Imperialismus, Berlin 1913. [687]

- 136 久留間鮫造抄訳「資本主義社会に於ける再生産の問題 (ローザ・ルクセンブルグ『資本累積論』よりの二章)」【大原社会問題研究所パンフレット】12, 1923年8月 (58p.)

- 137 横田千元訳「資本蓄積論」全2分冊, 白揚社, 1926年3月 (4, 2, 2, 294p.), 1926年9月 (295~609p.)

- 138 益田豊彦・高山洋吉訳「資本蓄積論」同人社, 1927年11月 (3, 1, 3, 614p.)

- 139 益田豊彦・高山洋吉訳「資本蓄積論」【社会思想全集】14, 平凡社, 1929年2月 (pp. 3~575) →III-154

- 140 長谷部文雄訳「資本蓄積論」全3分冊, 岩波文庫, (H)1934年7月 (217p.), (H)* (F)*

- 141 高山洋吉訳「資本蓄積論」全3分冊, 三笠文庫, (H)1952年4月 (170p.), (H)1952年10月 (188p.), (F)1952年10月 (211p.)

- 142 長谷部文雄訳「資本蓄積論」全3分冊, 青木文庫, (H)1952年12月 (178p.), (H)1953年6月 (4, 179~382p.), (F)1955年2月 (383~569p.)

Militarismus, Krieg und Arbeiterklasse. Rosa Luxemburg vor der Frankfurter Strafkammer. Ausführlicher Bericht über die Verhandlung am 20 Feb. 1914, Frankfurt 1914. [688]

- 143 田窪清秀訳「ミリタリズム, 戦争, 労働者階級」【選集】3 (pp. 108~122)

Junius: *Die Krise der Sozialdemokratie. Anhang : Leitsätze über die Aufgaben der internationalen Sozialdemokratie*, Zürich 1916. [689]

- 144 松山止戈訳「社会民主党の危機 (附録国際的社会民主主義の任務に関する方針書)」【ローザ政治論集】〔→III-31〕

(pp. 3~170)

- 145 片岡啓治訳「社会民主党の危機 (ユニウス・ブロシュール) <付録> 国際社会民主党の任務に関する指針」『選集』3 (pp. 150~286)

Anon. : *Entweder-Oder……Die Politik der sozialdemokratischen Minderheit*, 1916. [690]

- 146 田窪清秀訳「あれかこれか」『選集』4 (pp. 1~13)

Anon. : *Die Lehre des 24 März*, 1916. [691]

- 147 田窪清秀訳「三月二四日の教訓」『選集』4 (pp. 14~19)

Anon. : *Hundepolitik*, 1916. [692]

- 148 田窪清秀訳「犬の政策」『選集』4 (pp. 20~24)

Anon. : *Was ist mit Liebknecht*, 1916. [693]

- 149 田窪清秀訳「リーブクネヒトはどうなるか」『選集』4 (pp. 25~29)

Anon. : *Wofür kämpfte Liebknecht und weshalb wurde er zu Zuchthaus verurteilt?*, 1916. [694]

- 150 田窪清秀訳「リーブクネヒトはなんのために闘い、なぜ禁固刑をうけたか?」『選集』4 (pp. 36~44)

F. Mehring : *Karl Marx. Geschichte seines Lebens*, Leipzig 1918, S. 378-87. [695]

- 151 堺利彦訳「資本論第二巻及び第三巻」『マルクス主義』1-1, 1924年5月 (pp. 2~15)

W. G. Korolenko : *Die Geschichte meines Zeitgenossen. Aus dem russischen übersetzt und mit einer Einleitung versehen von……2 Aufl.* Bd. 1-2., Berlin 1919-20. [696]

- 152 教仁郷繁訳「ロシア文学論——コロレンコ『わが同時代人の歴史』自訳ドイツ語版への序文」『選集』4 (pp. 189~225)

Die Akkumulation des Kapitals oder was die Epigonen aus der Marxschen Theorie gemacht haben. Eine Antikritik, Leipzig 1921. [697]

- 153 宗道太訳『資本蓄積再論——亜流はマルクス説から何を作り出したか』同人社, 1926年7月 (276p.)
154 宗道太訳「資本蓄積再論——亜流はマルクスの理論から何を作り出したか、一つの反批評」『社会思想全集』14 (→ III-139) (pp. 577~738)
155 長谷部文雄訳『資本蓄積再論——亜流はマルクスの理論から何を作ったか』岩波文庫, 1935年2月 (224p.)

Die russische Revolution. Eine kritische Würdigung. Aus dem Nachlass herausgegeben und eingeleitet von Paul Levi, Berlin 1922. [698]

- 156 松山止戈訳「露西亜革命について」『ローザ政治論集』[→III-31] (pp. 171~213)
157 清水幾太郎訳「ロシア革命論」『選集』4 (pp. 226~264)
158 篠原正瑛訳「ロシア革命」佐藤昇編・解説『社会主義の新展開』平凡社 (現代人の思想18), 1968年1月 (pp. 46~84)

Einführung in die Nationalökonomie. Hrsg. von Paul Levi, Berlin 1925. [699]

- 159 佐野文夫訳『経済学入門』叢文閣, 1926年3月 (3, 8, 462p.)
160 佐野文夫訳『経済学入門』岩波文庫, 1933年2月 (374p.)
161 高山洋吉訳『経済学入門』三笠文庫, 1953年5月 (3, 351p.)
162 高山洋吉訳『経済学入門』(増補改訂版), 日月社, 1956年11月 (385p.)
163 岡崎次郎・時永淑訳『経済学入門』岩波文庫, 1978年5月 (461, 49p.)

B ルクセンブルク邦語研究論文目録

※ この項については、すでにほぼ完璧な目録が丸山敬一氏〔→III-346〕によって提供されている。その特徴は、内容別分類が採用されていることと、邦訳研究論文および書評・紹介についての文献にも細心の注意が払われていることにある。本稿でこの項を削除しなかった理由は、経済理論関係の文献にわずかながら補充の必要が認められる点と、現物確認によって、これもわずかながら表記を訂正する必要が認められるからである。そのいみで、この箇所は丸山氏の文献目録のささやかな増補改訂版とみなしていただければ幸いである。なお、凡例に記したように、ここでも邦訳研究論文（丸山文献で34項目）と書評（同20項目）は省略してあるので、その点からも氏の労作の参照は不可欠である。

- 164 山川菊栄「リープクネヒトとルクセンブルグ」『新社会』6-3, 1919年7月(pp. 44~49). 6-4, 1919年9月(pp. 40~48)
- 165 山川菊栄述「リープクネヒトとルクセンブルグ」インタナショナル社（水曜会パンフレット6）, 1921年10月(28p.)
- 166 福田徳三「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」『改造』1921年10, 11月号* / 『社会政策と階級闘争』*
- 167 河上肇「福田博士の『資本増殖の理法』を評す」（其の1）（其の2）『社会問題研究』31, 1922年3月(pp. 1~36). 32, 1922年4月(pp. 1~40)
- 168 河上肇「資本復生産に関するマルクスの表式（福田博士の『資本増殖の理法』を評す——其の3）」『社会問題研究』33, 1922年5月(pp. 1~36)
- 169 河上肇「資本主義的生産の必然的行き詰りの理法（福田博士の『資本増殖の理法』を評す——その4）」『社会問題研究』34, 1922年6月(pp. 1~38)
- 170 井口孝親「独逸革命の犠牲者ローザ・ルクセンブルグ」『我等』5-6, 1923年6月(pp. 1~24). 5-7, 1923年7月(pp. 1~17)
- 171 T I 生〔石浜知行〕「カフルとローザの夕（放浪記）」『社会思想』4-3, 1925年3月(pp. 40~44)
- 172 大内兵衛「ローザ・ルクセンブルグの手紙」『婦人公論』1925年7月* / 『経済学散歩』思索社, 1948年7月(pp. 99~115) / 同, 黄土社, 1951年6月(pp. 99~115) / 『大内兵衛著作集』9, 岩波書店, 1975年8月(pp. 217~228)
- 173 櫛田民蔵「ローザ・ルクセンブルグの思ひ出——『ローザ・ルクセンブルグの手紙』（井口孝親氏訳）を読む」『我等』7-10, 1925年10月(pp. 11~24) / 『櫛田民蔵全集』1（唯物史観）, 改造社, 1935年5月. 1947年6月(pp. 301~315) / 『社会主義は闇に面するか光に面するか他』朝日文庫23, 1951年8月(pp. 219~237) / 『櫛田民蔵全集』1, 社会主義協会出版局, 1978年6月(pp. 449~462) / 『社会主義は闇に面するか光に面するか』朝日選書165, 1980年9月(pp. 119~135)
- 174 山川菊栄「リープクネヒトとルクセンブルグ」上西書店, 1925年12月(71p.)
- 175 猪俣津南雄「資本主義崩壊の理論的根拠」『改造』8-1, 1926年1月(pp. 60~89) / 『帝国主義研究』改造社, 1928年1月(pp. 1~64)
- 176 河上肇「労働の生産力の発展と資本蓄積との衝突（ローザ・ルクセンブルグの『資本の蓄積』について）」『社会問題研究』69, 1926年2月(pp. 1~25)
- 177 河上肇「資本蓄積の行き詰まり（前冊の補遺）」『社会問題研究』70, 1926年4月(pp. 1~34)
- 178 西雅雄「国民経済か世界経済か——ローザ・ルクセンブルグの『経済学入門』を読む」『マルクス主義』4-4, 1926年4月(pp. 34~55)
- 179 佐多忠隆「資本主義崩壊過程の理論的研究——ローザ・ルクセンブルグ著『資本蓄積論』を読む」『帝国大学新聞』1927年1月30日*
- 180 高村浪夫編訳「ローザ・ルクセンブルグ」弘文堂, 1927年7月(2, 2, 231p.)
- 181 〔山川菊栄〕「ローザの逸話」『労農』2-9, 1928年10月（附録・婦人版p. 7）
- 182 正富汪洋「ローザ・ルクセンブルグ嬢を懐ふ」『現代日本文学全集』37（現代日本詩集・現代日本漢詩集）, 改造社, 1929年4月(pp. 338~339)
- 183 生田春月「ロオザ・ルクセンブルク」『現代日本文学全集』37〔→III-182〕(p. 384)
- 184 守田有秋「ローザ・ルクセンブルグ」『世界革命婦人列伝』解放社（解放郡書33）, 1929年*
- 185 浅野正一「資本蓄積論の一視点——資本論の方法より」『新興科学の旗のもとに』2-12, 1929年12月(pp. 33~52)

- 186 久留間敏造「資本の蓄積と固定資本の償却基金——猪俣氏著『帝国主義研究』中の一論点について」『大原社会問題研究所雑誌』8-2, 1931年9月(pp. 25~62)
- 187 落合敏也「名著物語——ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』」『経済往来』6-12, 1931年12月(pp. 110~120)
- 188 河合栄治郎「独逸社会民主党とマルキシズムの修正」1934年6月〔→I-32〕
- 189 山川菊栄「女性社会改良家ローザ・ルクセンブルグの人と生涯」『婦人公論』1934年12月(pp. 251~257)
- 190 相原茂「資本蓄積論——ローザ, ツガン, グロスマンを中心として」『経済評論』1-7, 1946年10月(pp. 41~58)／「蓄積異見抄」『蓄積と恐慌』角川書店, 1949年12月(pp. 127~167)
- 191 越村信三郎「資本蓄積の理論とその現段階的意義」『資本蓄積と計画経済』経済社, 1948年9月(pp. 1~84)
- 192 松井圭子「ローザ・ルクセンブルグ——女流革命家の生涯」『思索』14, 1948年9月(pp. 56~64)
- 193 坂本徳松『ローザ・ルクセンブルグ』黄土社(革命思想家評伝叢書), 1949年2月(7, 315p.)
- 194 関嘉彦「革命・独裁・民主主義——マルクス, カウツキー主義批判」1949年12月〔→II-144〕
- 195 猪木正道『ドイツ共産党史——西欧共産主義の運命』弘文堂(アテネ新書4), 1950年1月(164p.)／『社会思想入門』有紀書房, 1962年12月(pp. 79~211)
- 196 松井清「ローザ・ルクセンブルグにおける国民経済と世界経済」『国民経済と世界経済——民族理論との関係において』弘文堂(アテネ新書18), 1950年5月(pp. 44~79)
- 197 新島繁「資本蓄積論」『社会科学文献解題』〔→II-145〕(pp. 135~139)
- 198 野々村一雄「ローザ・ルクセンブルグ」弘文堂編集部編『社会科学講座』6(社会問題と社会運動), 弘文堂, 1951年3月(pp. 217~223)
- 199 岡総「再生産論をめぐる論争史」民主主義科学者協会・全日本学生社研連合編『講座資本論の解明』3, 理論社, 1952年3月(pp. 116~146)
- 200 猪木正道「ローザ・ルクセンブルグについて」秋元寿恵夫訳『獄中からの手紙』〔→III-5〕(pp. 153~165)
- 201 松尾博「世界経済の概念に関する一試論——ローザ・ルクセンブルグの見解を中心として」『彦根論叢』〔滋賀大〕11, 1952年10月(pp. 33~65)
- 202 大内兵衛「『ローザ・ルクセンブルグの手紙』によせて」北郷隆五訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙』〔→III-6〕(pp. 105~118)／『現代随筆全集』8(大内兵衛・南原繁集), 創元社, 1953年10月(pp. 149~160)／『大内兵衛著作集』9, 岩波書店, 1975年8月(pp. 229~241)
- 203 太陽寺順一「ローザ・ルクセンブルグ解釈の動向(学界展望)」『経済評論』3-4, 1954年4月(pp. 128~132)
- 204 三浦純雄「戦争と内乱——第1次世界大戦とローザ・ルクセンブルグ」民主主義科学者協会歴史部会編『世界歴史講座』5, 三一書房, 1954年6月(pp. 7~36)
- 205 神近市子「闘いの人生——ローザ・ルクセンブルグ」『灯を持てる女人——二十世紀世界婦人評伝』室町新書101, 1954年10月(pp. 157~166)
- 206 堀新一「恐慌学説批判(4)——ローザの再生産論」『名城商学』5-3・4, 1956年3月(pp. 55~122)
- 207 吉村励「ローザ・ルクセンブルグ」大河内一男・向坂逸郎・高島義哉・都留重人・名和統一編『社会主義講座』3(革命と行動の社会主義), 河出書房, 1956年6月(pp. 282~290)
- 208 平井潔・古沢友吉「解放史上の三女性——マルクス夫人, ローザ・ルクセンブルグ, レーニン夫人」東洋経済新報社, 1956年10月(266p.)
- 209 相原茂「ローザ・ルクセンブルグ」『マルクス経済学の発展』, 1956年11月〔→II-155〕(pp. 165~242)
- 210 清水嘉治「S. デュヴォイラツキーの「市場理論」について——ローザ『帝国主義論』批判の再検討のために」『経済系』35, 1957年7月(pp. 44~51)
- 211 鈴木喜久夫・吉田震太郎「再生産表式論」『マルクスの批判と反批判』〔→I-42〕(pp. 179~213)
- 212 吉村正晴「ローザ『拡張再生産表式の矛盾』に関する研究——貿易問題への再生産論の適用方法の一吟味」(前篇)『森教授記念論文集』(産業労働研究所報〔九州大〕別冊), 1958年3月(pp. 143~166). (後篇)『経済学研究』23-3・4, 1959年4月(pp. 129~149)
- 213 熊谷一男「ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』(古典案内)」『経済セミナー』24, 1958年11月(pp. 54~57)
- 214 西川正雄「20世紀のカサンドラ——ローザ・ルクセンブルグ小伝」(以下)『歴史教育』7-2, 1959年2月(pp. 63~68). 7-3, 1959年3月(pp. 97~101)
- 215 海道勝総「ローザ・ルクセンブルグをめぐる拡大再生産——表式についての論争」『富山大学紀要経済学部論集』14, 1959年3月(pp. 11~30)

- 216 鈴木喜久夫「再生産表式論におけるルクセンブルグとローゼンベルグ」『社会科学論集』〔埼玉大〕3, 1959年3月(pp. 1~21)
- 217 池上惇「ローザ・ルクセンブルクの資本蓄積論と貨幣蓄積の理論」『経済論叢』84-5, 1959年11月(pp. 36~50)
- 218 西川正雄「ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治」『史学雑誌』69-2, 1960年2月(pp. 1~46)
- 219 海道勝稔「拡大再生産表式における資本主義の内在的矛盾と恐慌——ローザ・ルクセンブルグ再生産論論争の考察」『富大経済論集』5-4, 1960年3月(pp. 55~86)
- 220 西川正雄「ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ」『歴史学研究』239, 1960年3月(pp. 45~53)
- 221 海道勝稔「拡大再生産表式と帝国主義の『経済的基礎』——ローザ・ルクセンブルグ再生産論論争の考察」『富大経済論集』6-2, 1960年10月(pp. 1~19)
- 222 高山満「ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』における一問題点〈ローザ研究覚書〉——ローザにおける「不均等発展」-「内在的矛盾」(資本制総再生産における)の理解を中心に」『東京経大会誌』29・30, 1960年12月(pp. 109~128)
- 223 関恒義「ローザ・ルクセンブルグ」『一橋論叢』45-4, 1961年4月(pp. 92~108)
- 224 酒井良樹「ローザ・ルクセンブルグと社会主義」『東京大学新聞』454, 1961年5月17日(pp. 8~9)／『現代思想』1961年8月*／〔酒井角三郎と改名のうえ〕『ローザ・ルクセンブルク論集』〔→III-281〕(pp. 329~345)
- 225 清水幾太郎「ローザ・ルクセンブルクから」『現代思想』1961年*
- 226 伊藤成彦「“誤ちにつけこむ,” ということ——最近のローザ・ルクセンブルグの評価」『図書新聞』607, 1961年6月10日(p. 2)
- 227 南成四「ルカーチのローザ・ルクセンブルグ論」『月刊さんいち』4-12, 1961年12月(pp. 9~14)／『ローザ・ルクセンブルク論集』〔→III-281〕(pp. 346~356)
- 228 松田秀人「スパルタクス派のプロレタリア党組織論——ローザ・ルクセンブルグの理論を中心として」『政治研究』〔九州大〕10・11, 1963年3月(pp. 58~87)
- 229 西村達夫「実現の論理とローザ・ルクセンブルク」『東北学院大学論集』〔経済学篇〕43, 1963年6月(pp. 25~46)
- 230 有田稔「マルクス理論とローザ理論の間」『経済論集』〔関西大〕13-1・2, 1963年6月(pp. 105~126)
- 231 松岡保「ローザ・ルクセンブルク」松田道雄編『反逆者の肖像』(20世紀を動かした人々13), 講談社, 1963年7月(pp. 97~172)
- 232 川鍋正敏「再生産表式論の研究と論争」遊部久蔵・大島清・大内力・杉本俊朗・玉野井芳郎・三宅義夫編『資本論講座』3(資本の流通 再生産), 青木書店, 1964年4月(pp. 176~234)
- 233 静田均「資本蓄積と拡大再生産表式——ローザ・ルクセンブルクに関する断章」『オイコノミカ』〔名古屋市立大〕1-1・2, 1964年4月(pp. 23~29)
- 234 伊藤成彦「ローザ・ルクセンブルクの人と思想——死後45年の記念に」『思想』480, 1964年6月(pp. 166~174)
- 235 海道勝稔「ローザ・ルクセンブルク拡大再生産表式の基本的性格」『土地制度史学』25, 1964年10月(pp. 26~39)
- 236 清水多吉「修正主義論争」現代イデオロギー研究会編『研究論叢』1964年12月*／『ローザ・ルクセンブルク論集』〔→III-281〕(pp. 57~73)
- 237 平井俊彦「ルカーチの『ローザ・ルクセンブルク論』」『甲南経済学論集』62, 1965年3月(pp. 45~66)
- 238 柴田高好「『平和革命』論の歴史的系譜——ローザとグラムシ」『思想』494, 1965年8月(pp. 37~56)
- 239 松田秀人「東独におけるスパルタクス派評価の方法——『ドイツ労働運動史綱要』の方法を手がかりとして」『法政研究』〔九州大〕31-5・6, 1965年8月(pp. 199~237)
- 240 池上惇「資本主義経済の『適応能力』理論の発生過程——ベルンシュタインとローザの論争によせて」1965年10月〔1-54〕
- 241 松井圭子「嵐の中の不屈の生涯(R. ルクセンブルク)」『潮』1965年11月(pp. 285~289)
- 242 広田司朗「団結の理想と分裂の現実」『マルクスと社会主義者』1966年1月〔→I-55〕
- 243 静田均「拡大再生産表式の問題点——ローザ・ルクセンブルクに関する覚え書」『オイコノミカ』2-1・2, 1966年1月(pp. 12~20)
- 244 衣笠哲生「ロシア社会民主党の組織問題をめぐるレーニンとローザ・ルクセンブルク」『社会科学論集』〔九州大〕6, 1966年2月(pp. 1~34)
- 245 伊藤成彦「正しいローザ像のために——柴田高好氏『『平和革命』論の歴史的系譜』批判」『思想』502, 1966年4月(pp. 102~108)

- 246 静岡均「資本蓄積と帝国主義——ローザ・ルクセンブルグに関する覚え書」『オイコノミカ』3-1・2, 1966年7月 (pp. 1~9)
- 247 肥前栄一「(資料) ローザ・ルクセンブルグ『ポーランドの産業的發展』」『立教経済学』20-2, 1966年7月 (pp. 197~233)
- 248 竹本信弘「ポーランド社会主義運動とその思想——若きローザの思想と行動(1)」『経済論叢』98-1, 1966年7月 (pp. 47~60)
- 249 竹本信弘「ローザ・ルクセンブルグのポーランド革命論——若きローザの思想と行動(2)」『経済論叢』98-2, 1966年8月 (pp. 55~74) / [248と併せて滝田修「若きローザの思想と行動」と改名・改題のうえ】『ローザ・ルクセンブルグ論集』[→III-281] (pp. 11~56)
- 250 早川修二「運動論・組織論をめぐるローザ・ルクセンブルグの思考方法」『現状分析』31, 1966年10月 (pp. 23~42)
- 251 高山満「ローザ・ルクセンブルグ——経済学方法論と『資本蓄積論』——ヒルファーディングとの対比において」『経済研究』[一橋大] 17-4, 1966年10月 (pp. 358~362) →IV-135
- 252 竹本信弘「反帝社会主義の金字塔——『インターナツィオナール』誌におけるローザ」『現代の理論』33, 1966年10月 (pp. 111~116)
- 253 [無署名]「『インターナツィオナール』誌の成立前後——スバルタクス・ブントの歴史のために」『インターナツィオナール』[→III-98] (付録 pp. 1~16)
- 254 田村雲供「ローザ・ルクセンブルグ文献目録」『社会科学』[同志社大] 2-1, 1967年2月 (pp. 152~125)
- 255 柴田高好「革命の弁証法」『思想』516, 1967年6月 (pp. 29~44)
- 256 真木実彦「ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』に対するレーニンの評註」(以下)『商学論集』[福島大] 36-1, 1967年6月 (pp. 176~204). 36-2, 1967年 月 (pp.)
- 257 鶴田満彦「ローザ・ルクセンブルグをめぐる論争」『資本論の展開』1967年12月 [→I-65] (pp. 150~161)
- 258 山口正之「停滞から発展への移行についての一論点——ローザ・ルクセンブルグからミハイル・カレツキーへの継承を中心に」『経済評論』17-1, 1968年1月 (pp. 144~157)
- 259 樹本純「ローザ・ルクセンブルグの視点——〈西方〉革命者の相貌」『現代の理論』49・50, 1968年2月 (pp. 36~46) / [川田洋「ローザ・ルクセンブルグへの視点」と改名・改題のうえ】『ローザ・ルクセンブルグ論集』[→III-281] (pp. 141~161)
- 260 松田秀人「『自然発生性理論』の問題とローザ・ルクセンブルグ理論の特質——最近の東独におけるスバルタクス派評価への批判として」『政治研究』16, 1968年3月 (pp. 53~84)
- 261 鶴田満彦「再生産論と帝国主義分析」『商学論集』9-6, 1968年3月 (pp. 1~34)
- 262 松田秀人「ローザ・ルクセンブルグ評価の流れ」『社会主義』201, 1968年8月 (pp. 95~108)
- 263 肥前栄一「ローザ・ルクセンブルグの資本主義観の二・三の特質について——ドイツ革命との関連からみた試論ノート」内田義彦・小林昇編『資本主義の思想構造』岩波書店, 1968年8月 (pp. 227~251) / 『ドイツ経済政策史序説』未来社, 1973年12月 (pp. 356~381)
- 264 竹本信弘「ローザ・ルクセンブルグの社会主義運動論」『思想』531, 1968年9月 (pp. 20~42) / [滝田修「ローザの社会主義運動論」と改名・改題のうえ】『ローザ・ルクセンブルグ論集』[→III-281] (pp. 99~140)
- 265 竹本信弘「ローザ・ルクセンブルグのマルクス主義方法論——『社会改良か革命か』の1つの論点」『経済論叢』102-4, 1968年10月 (pp. 17~36) / [滝田修「ローザの立場」と改名・改題のうえ】『ローザ・ルクセンブルグ論集』[→III-281] (pp. 74~98)
- 266 平野義太郎「カール・リープクネヒト, ローザ・ルクセンブルグ虐殺50周年によせて」『前衛』291, 1969年3月 (pp. 172~184)
- 267 柏崎千枝子「ポーランドにおける『1905年革命』の展開とポーランド・リトヴァ社会民主党」『歴史学研究』347, 1969年4月 (pp. 30~38)
- 268 浜田泰三「ローザとスバルタクス団」『現代の眼』1969年4月 (pp. 98~105) / [「ドイツ革命の悲劇」と改題のうえ】『ローザ・ルクセンブルグ論集』[→III-281] (pp. 313~328)
- 269 孝橋正一「ローザ・ルクセンブルグ 思想・行動・手紙」勁草書房, 1969年11月 (4, 333p.)
- 270 松田秀人「レーニンとローザ・ルクセンブルグ——組織問題における対立を中心として」『社会主義』216, 1969年12月 (pp. 28~36)
- 271 諫山正「ローザ・ルクセンブルグの『ロシア革命論』の思想的背景」『唯物史観』8, 1970年2月 (pp. 58~68)

- 272 山口正之「ローザ・ルクセンブルグの自動崩壊論批判」『経済』72, 1970年4月 (pp. 230~250)
- 273 富永幸生「ドイツ共産党創立大会——『大会議事録』を中心に」『現代史研究』24, 1970年6月 (pp. 12~52)
- 274 向山景一「ローザ・ルクセンブルグの蓄積論——現代資本主義把握へ向けての宇宙経済学方法論批判」『情況』23, 1970年8月 (pp. 5~22)
- 275 滝田修「ローザ社会主義思想に於ける陥穽——国際主義の質をめぐって」『情況』25, 1970年10月 (pp. 5~31) / 「ローザ国際主義の陥穽」と改題のうえ」『ローザ・ルクセンブルグ論集』〔→III-281〕 (pp. 261~311)
- 276 星野中「帝国主義と資本制生産の歴史性(1)——ドイツ社会民主党における帝国主義認識の側面」『経済学雑誌』63-4, 1970年10月 (pp. 31~60)
- 277 松岡利道「ローザ・ルクセンブルグ評価の変遷」『経済学雑誌』63-4, 1970年10月 (pp. 61~80)
- 278 肥前栄一「解説——ポーランド・ナショナリズム論争ノート」『ポーランドの産業的発展』〔→III-130〕 (pp. 199~236) / 「『ポーランド・ナショナリズム論争ノート——ローザ・ルクセンブルグ』『ポーランドの産業的発展』の背景」と改題のうえ」『ドイツ経済政策史序説』未来社, 1973年12月 (pp. 382~411)
- 279 酒井角三郎「序」『ローザ・ルクセンブルグ論集』〔→III-281〕 (pp. 5~10) / 初出: 明治大学消費生活協同組合発行『季刊・読書ジャーナル』1961年9月*
- 280 向山景一「ローザ『蓄積論』の現代的意義」『ローザ・ルクセンブルグ論集』〔→III-281〕 (pp. 163~260)
- 281 酒井角三郎・滝田修・清水多吉・向山景一・川田洋・南成四・浜田泰三『ローザ・ルクセンブルグ論集』情況出版, 1970年12月 (361p.) →III-224, 227, 236, 248, 249, 259, 264, 265, 268, 275, 279, 280
- 282 西川正雄「ローザルクセンブルグ——史料と文献」『思想』559, 1971年1月 (pp. 120~133)
- 283 星野中「帝国主義と資本制生産の歴史性——ローザ・ルクセンブルグ『社会改良か革命か』を中心に」武田隆夫・遠藤湘吉・大内力編『資本論と帝国主義論』下, 東京大学出版会, 1971年2月 (pp. 159~177) →IV-162
- 284 伊藤成彦「日本社会主義運動とローザ・ルクセンブルグ」『商学論纂』12-5・6, 1971年3月 (pp. 371~389) →III-288
- 285 渡辺昭「ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』の提起した問題」『社会科学』4-2, 1971年3月 (pp. 69~113)
- 286 伊藤定良「1910年におけるドイツ社会民主党の党内抗争」1971年4月〔→I-66〕
- 287 伊藤成彦「ローザ・ルクセンブルグ資料紀行」(1)~(5), 1608, 1971年8月9日 (p. 6). 1609, 1971年8月16日 (p. 6). 1611, 1971年9月6日 (p. 6). 1612, 1971年9月13日 (p. 6). 1613, 1971年9月20日 (p. 6)
- 288 伊藤成彦「日本社会主義運動とローザ・ルクセンブルグ」『思想』568, 1971年10月 (pp. 39~55) →III-284
- 289 松岡利道「ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』研究への一視点——『資本蓄積論』論争をめぐって」『経済学雑誌』65-4, 1971年10月 (pp. 105~127)
- 290 東中野修「ドイツ社会民主党と修正主義論争——改革と革命の問題」1971年12月〔→I-67〕
- 291 降旗節雄「ローザ・ルクセンブルグの資本蓄積論」『帝国主義論の史的展開』1972年3月〔→II-195〕 (pp. 99~112)
- 292 静田均「資本蓄積と帝国主義をめぐる一論争——O. パウエル対 R.ルクセンブルグ」(1)(2)『名城商学』21-3, 1972年3月 (pp. 1~13). 21-4, 1972年3月 (pp. 61~74)
- 293 武田信照「経済学の対象と経済法則——C.シュミット, R.ヒルファディング, R.ルクセンブルグ, N.ブハーリンの見解について」(1)(2)『法経論集』経済・経営編〔愛知大〕68, 1972年3月 (pp. 149~170). 70, 1973年1月 (pp. 81~106) →IV-177
- 294 伊藤成彦「ローザ・ルクセンブルグ——『社会改良か革命か』」石堂清倫・菊地昌典編『革命思想の名著12選』学陽書房, 1972年9月 (pp. 93~117)
- 295 星野中「ローザ・ルクセンブルグ」『マルクス経済学講義』1972年9月〔→II-199〕 (pp. 183~261)
- 296 小沢光利「恐慌論の一面化過程の分析——第1次大戦前夜の『恐慌=再生産論争』(1896-1913)をめぐって」『経済学研究』〔北海道大〕22-2, 1972年9月 (pp. 55~109) / 「恐慌論史序説」梓出版社, 1981年11月 (pp. 74~136)
- 297 聴荷弘「『ローザ・ルクセンブルグ論』を評す——トロツキストの反革命的意図との関連で」『前衛』345, 1972年10月 (pp. 109~119)
- 298 渡辺昭「帝国主義論の方法としての『資本の蓄積』——ローザ・ルクセンブルグ帝国主義論の根本問題」『経済理論』〔和歌山大〕127~131合併号 (創立50周年記念特集号), 1972年11月 (pp. 211~254)
- 299 丸山敬一「ローザ・ルクセンブルグと民族問題——トルコ問題を中心として」『法学雑誌』〔大阪市立大〕19-2, 1972年11月 (pp. 164~183)
- 300 静田均「帝国主義と資本蓄積——R.ルクセンブルグ対 N.ブハーリン」(1)(2)『名城商学』22-2, 1972年11月 (pp.

- 23~35). 22-3, 1973年3月 (pp. 62~134)
- 301 市原健志「崩壊論争史——『恐慌と崩壊』, 19世紀末におけるドイツ社会民主党の『崩壊論争』を中心として」『大学院研究年報』〔中央大〕2, 1973年3月 (pp. 47~62)
- 302 横山憲秀「ポーランド時代のローザ・ルクセンブルク」『歴史研究』〔大阪教育大〕10, 1973年3月 (pp. 84~110)
- 303 降旗節雄「ローザ・ルクセンブルクの蓄積論」『講座帝国主義の研究』1, 1973年3月〔→II-201〕(pp. 46~56)
- 304 湯浅魁男「帝国主義と《民族問題》」『民族問題の史的構造——国民の生産力批判序説』1973年8月〔→II-202〕
- 305 伊東孝之「東欧の民族問題とマルクス主義の民族自決権概念——ローザ・ルクセンブルク」『スラブ研究』〔北海道大〕18, 1973年9月 (pp. 53~96)
- 306 西川正雄「ローザ・ルクセンブルクとアジェンデ——マルクス主義研究国際週間に参加して」『朝日新聞』1973年10月19日(夕刊)(p. 7)
- 307 伊藤成彦「新しい社会主義像への模索——“ローザ・ルクセンブルク研究国際会議”から」『思想』594, 1973年12月 (pp. 151~159)
- 308 伊東孝之「ローザ・ルクセンブルクとロシア革命」『中央公論 歴史と人物』(特集・レーニンとロシア革命), 1974年1月 (pp. 170~184)
- 309 松岡利道「ローザ・ルクセンブルクの帝国主義論——その生成史的考察」『経済学論集』〔龍谷大〕13-4, 1974年3月 (pp. 36~63)
- 310 降旗節雄「ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』」『マルクス経済学の理論構造』1974年6月〔→II-205〕(pp. 197~200)
- 311 松岡利道「ローザ・ルクセンブルク——その人と思想」杉原四郎・菱山泉編『セミナー経済学教室』2(経済学史), 日本評論社, 1974年6月 (pp. 175~180) →IV-202
- 312 富永幸生「ローザ・ルクセンブルクのロシア革命論をめぐって」(以下)『青山法学論集』16-1, 1974年6月 (pp. 31~69). 16-2, 1974年12月 (pp. 127~157) / 『独ソ関係の史的分析 1917~1925』岩波書店, 1979年3月 (pp. 154~216)
- 313 星川順一「ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』の論理構成について」『経済学雑誌』71-1, 1974年7月 (pp. 1~34)
- 314 丸山敬一「ローザ・ルクセンブルクとポーランド問題——ローザ民族理論の問題点」『法学雑誌』21-1, 1974年9月 (pp. 41~82)
- 315 木村真樹男「ローザ・ルクセンブルクと『ポーランド問題』」『文学研究科紀要』〔早稲田大・大学院〕別冊1, 1975年2月 (pp. 215~231)
- 316 丸山敬一「ローザ・ルクセンブルク——社会民主主義運動論を中心として」岩佐幹三・山崎時彦編『政治思想・歴史と現代』法律文化社, 1975年5月 (pp. 122~146)
- 317 大野節夫「民族と階級との関連について——ローザ・ルクセンブルクとレーニン」(1)(2)『経済学論叢』〔同志社大〕23-3・4, 1975年6月 (pp. 74~99). 23-5・6, 1976年2月 (pp. 55~116)
- 318 岡村東洋光「ローザ・ルクセンブルク研究の一視角——『プロレタリアート』派のポーランド論と若きローザ」『経済学論叢』〔九州大・大学院〕34, 1975年7月 (pp. 1~26)
- 319 嶋田紅衛「『ポーランドの産業的発展』にみられるローザ理論の特徴——ローザ・ルクセンブルク経済理論の研究(1)」『経済学』〔東北大〕37-1, 1975年8月 (pp. 93~108) →III-343
- 320 升味準之輔「ソレル・ベルンシュタイン・ルクセンブルク——ユートピアと権力(その2)」1975年8月〔→I-74〕
- 321 石川勝彦「ローザ『資本蓄積論』の批判——山田氏の批判によせて」『大樟論叢』〔大阪経済大・大学院〕7, 1975年9月 (pp. 1~9)
- 322 伊東孝之「最近のローザ・ルクセンブルク研究——ポーランドにおける活動を中心として」『スラブ研究』20, 1975年10月 (pp. 143~174)
- 323 梅田美代子・阪東宏「ローザ・ルクセンブルク研究をめぐって」『歴史評論』306, 1975年10月 (pp. 30~47)
- 324 田沢哲「ローザ・ルクセンブルクと現代」(1)~(4)『新地平』(月刊労働者総合誌) 1975年10・11月 (pp. 10~15). 1976年2月 (pp. 106~111). 1976年8月 (pp. 122~126). 1977年8月 (pp. 90~97)
- 325 松岡利道「帝国主義論の学説史的研究——ドイツ社会民主党を中心に」1975年11月〔→I-75〕
- 326 神代光朗「二つのローザ・ルクセンブルク論」(1)(2)『三田学会雑誌』68-11・12, 1975年12月 (pp. 60~66). 69-1, 1976年1月 (pp. 44~55)

- 327 倉田稔「ドイツ社会民主党とストライキ論争——ヒルファディングとローザ」『労働運動史研究』59（日本の統一戦線運動），労働旬報社，1976年6月（pp. 275～291）→IV-221
- 328 川合研「ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』について——資本蓄積の困難性を中心に」『経済学雑誌』75-1，1976年7月（pp. 55～71）
- 329 渡辺昭「ローザ・ルクセンブルグ帝国主義論の方法」『帝国主義研究』II，1977年3月〔→I-78〕（pp. 373～418）
- 330 松岡利道「帝国主義と資本蓄積」『講座経済学史』4，1977年4月〔→I-80〕（pp. 93～108）
- 331 岡村東洋光「ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』についての一考察」『経済学研究』43-1，1977年7月（pp. 59～72）
- 332 坪郷実「経営レーテ運動の基礎——第1次世界大戦と大衆内活動家層の形成」(1)～(4・完)『法学雑誌』24-1，1977年7月（pp. 67～103）. 24-2，1977年10月（pp. 23～64）. 24-4，1978年3月（pp. 25～58）. 25-1，1978年9月（pp. 101～130）
- 333 阪東宏「ポーランド・マルクス主義者の第一世代——覚書」『歴史評論』329，1977年9月（pp. 1～9）
- 334 宅和公志「重商主義の一断片——ローザの『外部的市場』をめぐる」『商学集志』〔日本大〕47-2，1977年11月（pp. 73～86）
- 335 西川正雄「ローザ・ルクセンブルクの生家と墓」『学内広報』〔東京大〕391，1977年12月（pp. 12～13）
- 336 伊藤武「ローザ・ルクセンブルグと拡大再生産」『大阪経大論集』121・122，1978年3月（pp. 147～168）
- 337 松岡利道「帝国主義の必然性と戦争の必然性——ローザ・ルクセンブルク『社会民主党の危機』を中心に」『経済学論集』〔龍谷大〕17-4，1978年3月（pp. 161～194）
- 338 神代光朗「ドイツ社会民主党のポーランド論争（1897年～1913年）におけるローザ・ルクセンブルクの立場」『三田学会雑誌』71-5，1978年10月（pp. 204～224）
- 339 小野利明「国際主義の物質的基礎はなにか——ローザ・ルクセンブルグの経済理論から学ぶ」『社会評論』〔活動家集団思想運動編集発行〕18，1978年11月（pp. 94～101）
- 340 荒木勝「初期ローザ・ルクセンブルクのポーランド論にみられる思考の特質」『法政論集』〔名古屋大〕78，1979年2月（pp. 228～300）
- 341 佐川悠二「ローザ・ルクセンブルグ再生産論の基本的性格」『土地制度史学』83，1979年4月（pp. 42～53）
- 342 荒木勝「ローザ・ルクセンブルクのポーランド民族自治論に関する一考察」『法政論集』80，1979年6月（pp. 126～165）
- 343 松岡利道「ローザ・ルクセンブルクの帝国主義論」羽鳥卓也・吉田静一編『経済学史』世界書院，1979年6月（pp. 248～270）
- 344 嶋田紅衛「ローザ・ルクセンブルグ経済理論における国民経済の否定——ローザ・ルクセンブルグ経済理論の研究(2)」『経済学』41-2，1979年10月（pp. 115～131）→III-319
- 345 伊藤成彦「ローザ・ルクセンブルグとトルストイ」『信州白樺』34・35，1979年11月（pp. 122～130）
- 346 丸山敬一「ローザ・ルクセンブルグ邦語文献目録——1921年～1979年末」『中京法学』14-4，1980年3月（pp. 25～47）
- 347 渡部恒夫「社会政策論とローザ・ルクセンブルグによるペルンシュタイン理論の批判」1980年4月，1980年7月〔→I-83〕
- 348 松岡利道「理論と実践の弁証法——初期ルクセンブルグの方法」『経済学論集』〔龍谷大〕20-4，1981年3月（pp. 34～50）
- 349 いいだも「古典案内 ローザ・ルクセンブルグ『経済学入門』」『経済学批判』10，1981年6月（pp. 127～147）
- 350 丸山敬一「民族の自決権とプロレタリアートの自決権——プロレタリア・インターナショナルイズムはいかにして可能か」『国家論研究』20，1981年7月（pp. 62～82）
- 351 川名隆史「ローザ・ルクセンブルグとポーランド問題——ポーランド自治をめぐる」『国家論研究』20，1981年7月（pp. 83～103）
- 352 福阿利裕「ドイツ社会民主党における修正主義論争」1981年11月〔→I-85〕
- 353 長島伸一「ローザ・ルクセンブルグの資本主義観と帝国主義論」平林千牧編『経済学説史研究』時潮社，1982年4月（pp. 237～269）

〔付記〕小稿が成るにあたっては多くの方々の有益な御指導を賜わった。最近の外国語研究文献目録をはじめ、現物未確認の文献についてもさまざまな「情報」を御教示いただいた東京大学の西川正雄先生、貴重な文献をお貸しいただき、また本稿掲載の便宜をはかって下さった本学の天野勝行先生、カウツキー研究者 相田慎一氏、ヒルファディング研究者 河野裕康氏、法政大学大学院の大山均氏に心より感謝いたします。

末筆ながら、本目録作製のため図書利用の便宜をはかっていただいた、国立国会図書館、社会労働問題研究センター（大原社研・協働会文庫）、法政大学、一橋大学、慶応大学、東京大学、長野大学の各付属図書館の関係者各位に厚くお礼申し上げます。

（1982年6月12日）

〔追記〕その後の調査によって、すでに補充の必要が認められる文献が数点あるが、今後の専門研究者諸賢からの御指摘とあわせて、いずれ機会が与えられたとき増補・改訂したい。

（1982年7月28日）